

新詳地理B

新しい！詳しい！わかりやすい！ 地理B教科書の決定版

特色1 本文・図版の運動と整理された展開で、さらに理解しやすい「系統地理」！……p.2

自然環境

- ・プレートテクトニクスを詳しくわかりやすく説明し、大地形の理解が深まる
- ・地震などの災害についてわかりやすく説明し、防災・減災の学習にまでつながる
- ・豊富な模式図・写真とともに丁寧にわかりやすく記述した小地形
- ・気候学習の基盤となる大気大循環について、より詳しくわかりやすく記述

産業

- ・激変する世界の最新動向だけでなく、変化の経緯からしっかり学べる万全の記列構成
- ・各種工業の成因や特徴を充実させた説明で、変容する工業がより深く理解できる

共通

- ・「日本」の記述を充実し、最新情勢について積極的に記載
- ・本文をさらに深める別角度の視点や最新の事例をコラムで紹介

特色2 今がわかる！背景までわかる！臨場感あふれる最新の「地誌」！……p.20

- ・「日本との結びつき」を新設！世界の諸地域の様相が一層わかる
- ・自然→歴史→産業→課題・展望の展開で、これからの地域の姿が見えてくる

特色3 着実に習得できる「地理的技能」……p.28

特色4 スムーズに学習を進められるよう工夫を凝らした誌面構成……p.30

教科書の全体構成……p.32

ユニバーサルデザインに対応……p.34

授業への万全のサポート……p.35

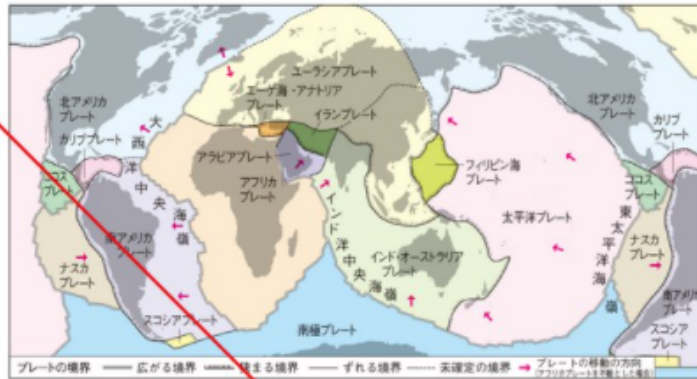
プレートテクトニクスが確立した背景から理解できる！

ウェゲナーが大陸移動説を確立するに至った背景まで本文中で解説しています。

大切な用語をわかりやすく説明した「用語解説」！

学習の基礎となるプレートとは何か、またその概念について、側注欄の「用語解説」でしっかり確認できます。

p.30-31



▲ 世界のおもなプレートの分布 (Diercke Weltatlas 2008, ほか)
 図例 広がる境界と狭まる境界にはどのような地形がみられるだろうか。p.29 図④と比較しよう。

リード
 図④や図⑤はプレートの動きを示している。世界の大陸や大地形はどのように形成されたのだろうか。

用語解説
超プレート 大陸では約30～40km、海洋底では約10kmの厚さをもつ地殻とその下のマントルの最上部数十kmの部分からなる。大陸プレートと海洋プレートがあり、海洋プレートのほうがたかく高密度であるため、海洋プレートは大陸プレートの下へ沈み込む。

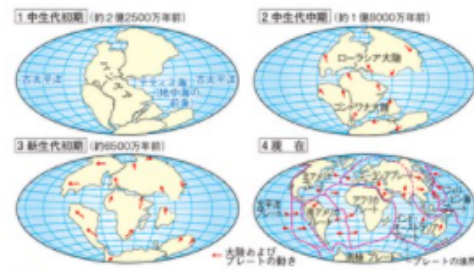
地質時代	年代(100万年単位)
先カンブリア時代	4000
古生代	651
中生代	65
新 古第三紀	65
生 新第三紀	250
代 第四紀	250

▲ 地質時代の区分 (International Commission on Stratigraphy 資料)

(2)プレートの運動とさまざまな境界

移動する大陸
 1912年、ドイツ人のウェゲナーは、大西洋をはさむ南アメリカ大陸とアフリカ大陸の海岸線の形の類似性に着目し、かつて存在した一つの巨大大陸パンゲアが、分裂・移動して現在の大陸の分布にいたったとする大陸移動説を唱えた。ウェゲナーは、六つの大陸に残された古生代末期の水河の痕跡や動植物の分布などの連続性を発見し、大陸移動説の証明をめざした。しかし、大陸を移動させる原動力を説明できず、当時、この考えは受け入れられなかった。その後、海底地形などの研究が進み、1970年ごろに大陸移動説を科学的に裏づける考えが確立された。これをプレートテクトニクスという。今日では、パンゲアは中生代中期にはローラシア大陸とゴンドワナ大陸に分かれ、その後も大陸が分裂・移動を続けて現在の六つの大陸ができたと考えられている。

プレートテクトニクスでは、地球の表層は厚さ100km程度のかたい岩石でできた**プレート**でおおわれていると説明される。プレートは十数枚に分かれており、それぞれのプレートは、海面をおおった流氷のブロックのようにゆっくりと水平方向に滑り動いている。このプレートの運動によって大陸も移動する。各プレートの中央部は安定するが、となり合うプレートの境界には内力的力が集中するため、地震変動や火山活動が生じ、巨大山脈などの大地形が形成される。



▲ 大陸の移動と現在の大陸の分布 (De Grote Bosatlas 2007)
 図例 大陸と大陸の間のプレートの動きに注目しよう。

プレート境界と大地形
 プレートの境界は、各プレートの動く向きによって、狭まる境界、広がる境界、ずれる境界の3種類に分類できる。それぞれの境界付近では、プレートの運動によって激しい地震変動や火山活動が起こる。このような地域を**活動帯**とよび、大山脈や海溝、海嶺などの大地形がつけられる。

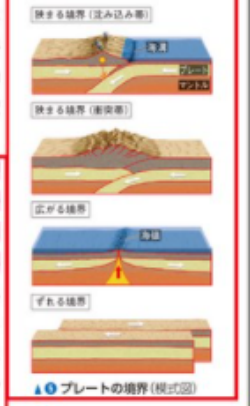
[1]狭まる境界 となり合う二つのプレートがたがいに近づき、押し合う力がはたらく境界で、日本海溝のように海洋プレートがほかのプレートの下へ沈み込んでいる境界(沈み込み帯)と、アルプス山脈やヒマラヤ山脈のように大陸プレートどうしが衝突している境界(衝突帯)に分けられる。衝突帯では、地層が徐々に押し曲げられて褶曲が起こり、大規模な褶曲山脈ができる。一方、海洋プレートが大陸プレートの下へ斜めに沈み込んでいる境界では、海底は急に深くなって海溝となり、大陸プレートのへりには**弧状列島(島弧)**や**火山列**ができる。弧状列島は大山脈の一部が海洋上にそびえているとみなすこともできる。

[2]広がる境界 となり合うプレートがたがいに遠ざかり、引っ張り合う力がはたらく境界で、おもに太平洋・大西洋・インド洋の海底にあり、海嶺をなしている。海嶺では地球内部からマントルがわき出して、海洋プレートが次々と形成されている。東アフリカの**地溝帯**や**紅海**は、広がる境界のでき始めと考えられる。

[3]ずれる境界 となり合うプレートがたがいにすれ違い、水平方向にずれ動くような力がはたらく境界で、おもに海城に分布する。境界の末端がほかの種類の境界に変わるため、トランスフォーム断層ともよばれる。陸上では、アメリカ合衆国太平洋岸のサンアンドレアス断層やトルコの北アナトリア断層などがみられる。



▲ サンアンドレアス断層(アメリカ合衆国、カリフォルニア州) カリフォルニア州の太平洋岸近くをほしり、その長さは1000km以上に及ぶ。



▲ プレートの境界(模式図)

用語解説
活動帯 活動帯は、地震変動や火山活動が活発な帯状域で、プレートの境界帯に分布する。褶曲山脈帯や地層が曲がらでできている山脈、地震や海溝運動と山脈の隆起運動が同時に進む場合と褶曲運動がずれた場合に、山脈が隆起する帯がある。ヒマラヤ山脈は褶曲山脈の一つで、インド・オーストラリアプレートとユーラシアプレートが衝突して成長した。

チェック
 3種類のプレート境界の特徴を説明しよう。

模式図や写真でわかる！

プレート境界の概念、およびその種別について、側注欄を生かしてビジュアルな資料とともに解説しているので、よりイメージをつかめるようになりました。

プレート境界の特徴を整理！

各プレート境界ごとに、各境界で働く力の向き、形成される大地形、その分布を記述しています。これにより、それぞれの特徴を比較・整理できます。

本文・図版の連動と整理された展開で、さらに理解しやすい「系統地理」！ 地震などの災害についてわかりやすく説明し、防災・減災の学習にまでつながる

地震など、今、目を向けるべき災害に関する基礎事項をおさえられます。また、防災・減災学習につながります。

p.32-33



▲ 世界の有名な火山と地震の震源地の分布(Diercke Weltatlas 2008, ほか)
■ 火山や地震の震源地はどのようなところに集中しているだろうか。p.30 図①と比較しよう。

リード

火山が作り出す地形や地震災害の特徴をみていこう。

① マグマが地表に噴出したものが溶岩である。溶岩が流れる過程で冷えて固まった地下のマグマにまじりこんだ形で溶岩が溶岩流として形成された直径1〜2kmより大きい溶岩流。

用語解説

■ カルデラ 大規模な噴火で火山噴出物が大量に放出され、溶岩が冷えて固まった地下のマグマにまじりこんだ形で溶岩が溶岩流として形成された直径1〜2kmより大きい溶岩流。

広がる地球上に位置するアイスランドの地熱発電と温泉



(3) 火山と地震の活動

火山による災害

沈み込んだ海洋プレートが、およそ100kmの深さに達するとその上面でマグマが生じ、マグマは上方へ移動して火山を形成する。マグマが地表に噴出すると、溶岩台地や谷に流れ込んだ溶岩による堰止湖、円形の凹地であるカルデラなどの地形が作り出される。火山は噴火に伴って、溶岩のほか火山灰や火山ガスなどを放出する。空中に噴き上げられた火山灰は、風下側に降り積もって町や農地をおおほく、何か月も大気中をたどって日射をさえぎり、地球規模で気温を低下させることもある。また、火山灰や溶岩片、高温のガスがまじり合って流れる溶岩流は高速で山ろくに広がりが、大きな被害をもたらす。地震や噴火が引き金となって、山全体の形が変わってしまうほど大きく崩れると、火山の周辺に大災害をもたらすこともある。

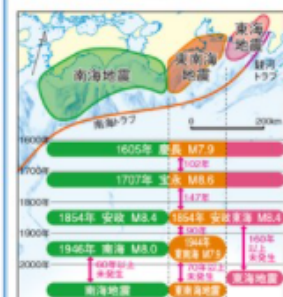
火山の恩恵

火山周辺は、災害の危険性が高い一方で、溶岩が風化して肥沃な土壌が形成され、農業がさかんな地域もある。高温のマグマによって熱せられた地下水は、温泉に利用されることもある。火山の美しい景観は観光資源としての価値も有し、日本の国立公園のおよそ3分の2には火山がある。火山の山ろくの高原は、高冷地野菜の主産地や避暑地、スキー場などとなっているところも多い。火山の多いアイスランドやニュージーランドでは地熱発電もさかんに行われている。

時代を捉えたトピックや資料

これから起こりうる災害による人的被害を減らすために求められることを、その理由とともに記述しています。日本大震災)などの具体事例を通して、

トピック 津波への備え



▲ 太平洋で発生した過去の巨大地震の震源地(気象庁資料) 南海トラフでは、プレート境界地震が定期的に発生している。この地域で地震が発生すると、巨大津波が発生することが想定されている。

地震の分布と災害

プレートの沈み込み衝突により、プレート内の岩盤にはひずみが蓄積される。蓄積されたひずみが限界に達すると、岩盤がこわれ、地震が発生する。地震の震源地は、内の営力が集中するプレートの境界に集中している。詳しくみると、活断層に沿ったところで、地下の岩盤が割れたり、ずれ動いたりして、地震が発生している。なかでもプレートの境界をなしている活断層が広範囲でずれ動く、巨大地震が発生する。

海洋プレートが沈み込む境界で発生する海溝型地震では、津波が発生する場合がある。2011年の東北地方太平洋沖地震では、東日本の太平洋側を中心に大きな津波が襲った。津波は震源から離れた場所にも到達するため、地球規模で津波災害をもたらすこともある。一方、内陸部の活断層がずれ動いて発生する直下型地震では、1995年の兵庫県南部地震における神戸市のように、震源に近い都市は甚大な被害を受ける。また、地震のゆれは、震源から遠ざかるにつれて減衰するが、沖積平野のような軟弱地盤ではゆれが増幅されて、被害が集中する危険もある。地震のゆれは、津波、斜面の土砂崩れ、地盤の液状化、火災などを引き起こし、2次災害を生じさせる。こうした災害に対して脆弱な地域は、一度災害が発生すると被害が拡大しやすく、影響が長期化する。

用語解説

■ 活断層 過去数十年間に繰り返し活動してきた断層で、将来も活動する可能性が高い断層。日本列島には、活断層が高い密度で分布しており、過去の断層が再び動きだして、そのたびに直下型の地震を生じさせてきた。



▲ 津波でほとんど建物が壊された沿岸地域(宮城県、南三陸町、2011年3月撮影)

チェック

火山や地震の活動が人間の生活に与える影響を説明しよう。

p.80-81

防災・減災学習につながる

p.326

①誌面全体を使い、模式図や写真、解説を効果的に配置しました。
②本文では、小地形の形成から自然環境と人々の生活との関わりまで丁寧に記述しました。

模式図や写真を効果的に組み合わせる掲載!

本文だけではイメージしにくい事項について、写真や模式図を組み合わせることで、地形に関する理解が深まります。



① 川の上流から下流の模式図 山地から海まで流れる間に、河川はどのような地形をつくるのだろうか。

リード
① 川の上流から下流にみられる地形を詳しく紹介している。河川はどのような地形をつくるのだろうか。また、それらの地形は人々の生活にどのような影響を与えているのだろうか。

3 河川と海岸の小地形

(1) 小地形の形成と河川地形

外的営力と小地形の形成

太陽エネルギーは外的営力の源であり、地球規模での大気や水の循環の原動力である。水の循環を例にとると、太陽熱によって、海水が蒸発し、大気中の水蒸気となって陸地へ上昇し、雨などの降水となったあと、河川水として陸地を流れ、再び海へ戻る。河川は上流で山地を侵食し、生じた

砂礫を下流へ運搬し低地や海岸に堆積させる。このような河川水の流れ(流水)をはじめ、波・氷河・風・熱などによっても、岩石の風化や、土砂の侵食・堆積・崩壊などの作用が生じる。その結果、外的営力によって、地表面は平直化していく。この外的営力は狭い範囲に作用するため、比較的小規模な谷や沖積平野などができる。沖積平野は、山地から河口にかけて河川が運搬してきた土砂が堆積した平野で、これらは小地形とよばれる。小地形の性質を知ることは、持続的な土地利用や自然災害の軽減のために重要である。

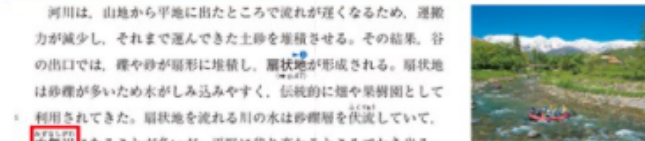
山地・谷口の河川地形
日本を含む温暖湿潤地域の地形の大半は、河川の影響を強く受けている。傾斜が急な山地を流れる河川は、侵食力や運搬力が大きく、山地は河川によって深く刻まれV字谷が形成される。山地では、地形を侵蝕する過程で起こる山ろくには、崩れた土砂が堆積している場所も多く、そうした場所では、土砂災害を受ける危険性が高い。山地が侵食されて生じる土砂は河川によって下流に運搬される。その量は、洪水が発生したときに、より多くなる。陸地が活発でない山地や山間盆地などでは、河川沿いに土砂が堆積して沖積平野が広がる。

さらに下流へいくと、河道の位置を自由に変わらせるようになるので、河川は蛇行する。洪水をきっかけに流路が変わると、三日月湖(河跡湖)ができる。河道の近くには、洪水時に水がたまり、自然堤防や後背湿地、自然堤防と背後は、水はけの悪い後背湿地となる。洪水時に河川の氾濫によって形成される地形全体を氾濫原とよび、自然堤防や後背湿地、三日月湖を含む地域をさす。日本の農村では、自然堤防上は畑や畑として、後背湿地は水田として利用されることが多い。都市の計画では、蛇行する河川は人工的に直線化され、小地形と土地利用との関係は不明瞭になっている。

河口付近の三角洲
河口に近づくと、流れが緩滞して河川は運搬力を失うため、砂や泥が堆積して三角洲(デルタ)を形成する。ライム川やミシシッピ川などの大河は、河口に巨大な三角洲を形成している。三角洲は氾濫で水はけが悪い。台風などの熱帯気圧による暴風による高潮や被害が発生することがある。その一方で、堆積した土は肥沃であり、新田のような水路は水運にも利用できることから、古くから農地や人口密集地になってきた。



② 扇状地とその模式図(山形県、南アルプス市、2013年撮影) ③ 氾濫原とその模式図(北海道、石狩川流域) ④ 三角洲とその模式図(三重県、鳥羽市、安曇川河口) 写真の三角洲は、扇状地と内陸状三角洲のどちらだろうか。



⑤ 河川の周りに堆積する砂礫(長野県、白馬村)

プラス④ 美禰川の形成
美禰川は、山脈の裾野より高圧帯が周辺の平野より高くなった河川を天川という。扇状地は、河川の氾濫が多く、耕地などは氾濫から守るために河堤が築かれてきた。河堤の氾濫を防ぐために河堤が築かれてきた。河堤の氾濫を防ぐために河堤が築かれてきた。

チエック
河川沿いに形成される地形について、土地利用の特徴を説明しよう。



トピック 縄文海進によって形成された沖積平野
日本で最も広い関東平野は、台地が傾斜している。台地の間を利根川、荒川、多摩川などの河川が流れ、河川沿いに沖積平野をつくっている。現在の沖積平野は、海面が低下していた1万年前ごろまでは深い谷だった。その後、地球が温暖化して氷河が融け、海面が上昇すると、7000年前ごろには谷が埋まって沖積平野になった。当時は、現在よりも温暖であり、日本付近の海面は2~3mほど高かったと推測されている。この海進の拡大は縄文海進とよばれる。その後、おぼれ谷は河川の運搬する土砂によって、上流から埋め立てられ、沖積平野となった。おぼれ谷が広がった当時、魚介類などの食料から出るゴミや骨などが捨てられて、海岸沿いにつくられたのが貝塚である。縄文時代の海岸線の位置はこの貝塚から推定された。

沖積平野の活用
沖積平野の扇状地には、高さ2~3mから数十m以上の層に囲まれた台地や小山のような丘陵が分布することがある。台地の多くは、かつての沖積平野や浅い海底が、土地が隆起したり海面が低下したりすることで形成された。河川沿いには河川段丘や海岸にできる海岸段丘も台地の地形の一つである。

台地や丘陵は、水を得にくく、起伏もあるため、水田にはあまり適さない。そのため、畑や果樹園、雑木林などに利用されてきた。しかし近年は、大都市圏の郊外を中心に台地の地形が変化が進み、ニュータウンや工業団地、ゴルフ場などの開発が進んでいる。**台地は、周囲よりも標高が高く地盤が安定しているため、水没や直下型の危険性が低い。そのため、災害時の避難地域として適している。**2011年の東日本大震災以降は、被災地を中心に、海岸沿いなどの低地にあった住宅地を台地に移す動きもみられるようになった。

本文と側注欄の相乗効果でいっそう理解しやすい
本文では、河川地形の形成因子、形成過程について丁寧に記述しています。谷底平野や三日月湖などの重要語句を補い、また、必要に応じて側注欄を有効活用して補足解説しています。(※ は本文中の地理用語を増強)

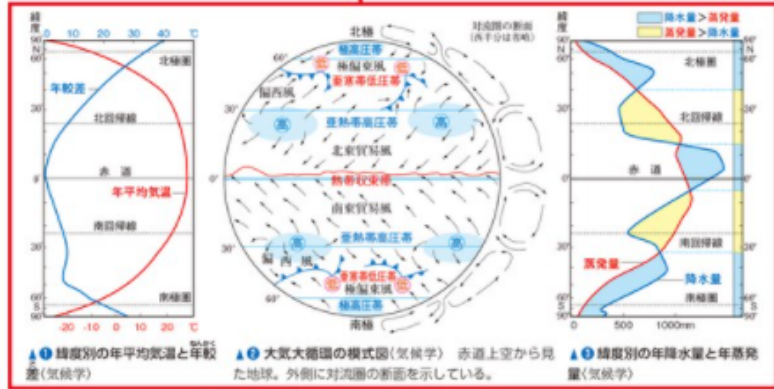
山から海に向けて、河川の流れに沿ってまとめた構成
【山地・谷口→中・下流→河口付近】
上流から下流への流れに沿って、それぞれの場所で形成される河川地形を理解できます。
小地形が人々の生活や防災にどう関わるかがわかる!

関連し合う資料を並べて掲載することで、緯度ごとの特徴を相互に確認しながら学習できます。

p.52-53

季節変化のメカニズムがわかる！

地球規模の季節変化や、雨季や乾季が生じるメカニズムが理解できます。



リード

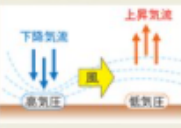
①から読み取れるように、年降水量は緯度によって異なる。その原因を気圧帯や風向に着目して考えよう。

用語解説

恒常風 一年中、決まった方向に吹く風のこと。貿易風、偏西風、極偏東風がある。
気圧帯 同程度の気圧をもつ帯状の地域のこと。周囲より気圧の高い地域を高圧帯、低い地域を低圧帯という。

プラスα

風の成因
大気が温められたり冷やされたりすると、大気の温度や密度が変化する。冷たく重い空気は下降気流を、温かく軽い空気は上昇気流を引き起こす。周囲より空気の密度が高いところは高気圧(高圧帯)、低いところは低気圧(低圧帯)となり、気圧差が生じる。風は高気圧から低気圧に向かって吹き、気圧差が大きいときに風が強くなる。



(2)大気大循環と風

地球規模の大気循環 風は気圧が高いところから低いところに向かって吹く。このため、地球の表面付近では、高圧帯から低圧帯へ大規模な風の流れ(大気大循環)がつけられる。赤道付近では太陽エネルギーを大量に受けるために、空気が温められ上昇気流が発生して熱帯収束帯(赤道低圧帯)ができる。熱帯収束帯で上昇した気流は、地球の自転の影響により緯度20〜30度付近で下降気流となり、**亜熱帯高圧帯(中緯度高圧帯)**ができる。ここから高緯度に向かって西寄りの偏西風、低緯度に向かって東寄りの貿易風が吹く。極付近では、冷やされた空気により下降気流が発生して極高圧帯が形成され、ここから極偏東風が吹き出す。偏西風と極偏東風が衝突する緯度60度付近では、上昇気流が発生し、**亜寒帯低圧帯**となる。偏西風や貿易風、極偏東風などの**恒常風**によって低緯度と高緯度の熱の交換が行われ、地球全体の気温差は小さくなっている。

気圧帯の季節移動 熱帯収束帯などの気圧帯は、太陽から受けるエネルギーとそのエネルギーの極方向への移動によって生じるため、ほぼ緯度に沿っている。地軸の傾きにより、北半球の夏至のころには、太陽からのエネルギーは北半球に大量に降り注ぐ。このため、熱帯収束帯が北半球側に移動し、それにあわせて亜熱帯高圧帯も北に移動する。一方で、北半球の冬至のころには、太陽からのエネルギーは南半球に大量に降り注ぐこととなり、1年周期で気圧帯が南北移動する。気圧帯が移動することにより、雨季や乾季などの季節変化が生じる。

トピック ジェット気流の蛇行

⑤ ジェット気流の蛇行 北半球でジェット気流が長期間にわたって南下した地域では、通常より寒冷な大気におおわれて平年よりも気温が低くなる。一方、ジェット気流が北上した地域では、温暖な大気におおわれて平年よりも気温が高くなりやすく、夏には干ばつが深刻化することもある。

⑥ ジェット気流の蛇行 北半球でも高緯度側からの風が卓越して寒くなると、低緯度側からの風が卓越して暖くなるところが生じる。

⑦ 日本付近でジェット気流が南に蛇行すると、冷たい空気が流れ込み冷夏や寒冬となる。一方で、ジェット気流が北に蛇行すると、真夏や暖冬となる。日本を含む中緯度帯の異常気象は、上空のジェット気流の異常な蛇行に伴って発生することが多い。

異常気象の原因の1つがわかる！

日本の暑夏や暖冬などの異常気象を引き起こす原因の、深い理解につながります。

季節風(モンスーン)

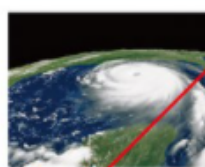
陸は温まりやすく冷えやすい。一方、海は温まりにくく冷えにくい。この比熱の違いなどにより、冬には相対的に冷やされた大陸上は下降気流が発生して高気圧が生じ、陸から海へ向かって乾燥した風が吹く。夏には温められた大陸上は上昇気流が生じて低気圧ができ、海から陸に向かって湿った風が吹く。こうして、季節によって風向が変わる**季節風(モンスーン)**が現れる。夏の季節風は、とくに東アジアから南アジアにかけて多量の降水をもたらすため、雨季そのものをモンスーンということもある。この地域の稲作地帯は、季節風をもたらす夏の降水に支えられている。一方で、季節風は大雨をもたらす、洪水や地滑りなどの災害を引き起こすこともある。

熱帯低気圧

熱帯低気圧は、海面水温が高い低緯度の海上で発生・発達するうず巻き状の低気圧である。熱帯低気圧が発達して一定以上の風速に達すると、地域によって**台風(北西太平洋)・サイクロン(インド洋、南太平洋)・ハリケーン(大西洋、北東太平洋)**などとよばれる。熱帯低気圧は、高緯度側に移動しながら、強風や大雨による災害を引き起こす。また、熱帯低気圧が接近すると、海水が沖から海岸に吹き寄せられたり、気圧の低下によって海水が吸い上げられたりして海面が上昇する。この現象を高潮といい、ガンジスデルタのような沿岸部の低地に災害をもたらす。

用語解説

熱帯低気圧と温帯低気圧
低気圧には熱帯低気圧と温帯低気圧(→p.64)の2種類があるが、成因も構造も異なる。熱帯低気圧は、前線に伴わず、低緯度側から高緯度側に移動する。それに対して温帯低気圧は、中緯度で温かい空気のかたまりと冷たい空気のかたまりの境目に発生し、寒冷前線や温暖前線などの前線を伴う。温帯低気圧は中緯度では偏西風に流されて西から東へ移動する。



⑨ チェック 偏西風などの恒常風が気候に与える影響を説明しよう。

災害をもたらす熱帯低気圧の記述を充実！

風が吹くメカニズムがわかる！

丁寧な解説とわかりやすい模式図で、風の成因がしっかり理解できます。

本文・図版の連動と整理された展開で、さらに理解しやすい「系統地理」！
激変する世界の最新動向だけでなく、変化の経緯からしっかり学べる万全の配列構成

体系的な配列で理解が深まる！

産業分野では、地域事例を豊富に取り上げながら、系統的に整理しています。

「歴史的背景」をふまえ、「最新情勢と課題」や「日本」まで、各単元を体系立てて学習できます。

※この構成は、第Ⅱ部3章「人口、村落・都市」、4章「生活文化、民族・宗教」でも共通です。

農業の学習展開

農業が発達してきた歴史、立地を決める要因、伝統農業から商業的農業・企業的農業、農業の現状と課題まで、順序立てて整理しています。



工業の学習展開

工業が発達する背景から丁寧に記述し、最新の情勢まで着実に理解できます。



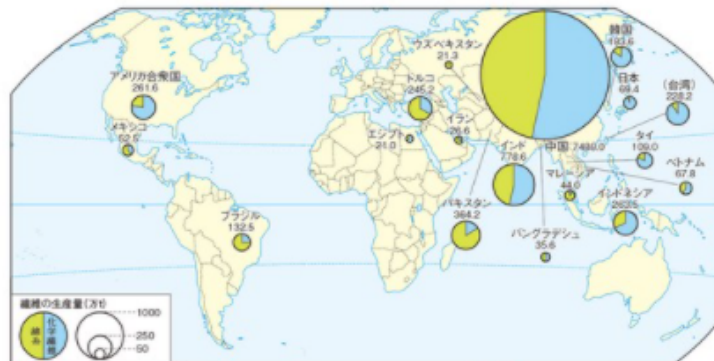
工業の現状と最新の動きをとらえるために、「各種工業の特徴と変容」のページを新設しました。

現代世界の工業の現状と課題

- (1) 工業のグローバル化 (1 ページ)
- (2) 各種工業の特徴と変容 (3 ページ)
- (3) 脱工業化と新たな産業 (1 ページ)

工業の種類別特徴 (5 種類) について まとめたページを 3 ページ新設！

NEW!



▲おもな国・地域の繊維の生産(おもに2013年)(繊維ハンドブック2015) 図説 生産の量と内訳に注目しよう。

(2) 各種工業の特徴と変容

繊維工業 繊維工業は、綿花や羊毛、ナイロンやポリエステルなどの繊維原料を加工して糸や織物を生産する労働力指向型の工業であり、人件費が安く、多くの労働者を確保できる地域に発達する。1980年代以降、先進国から発展途上国への生産拠

の移動が顕著になり、中国は世界最大の繊維工業国に成長した。近年は、中国よりも人件費が安いベトナムやミャンマーなどで輸出加工区や工業団地の整備が進められ、徐々に生産拠点が移行している。

20世紀前半にナイロンなどの化学繊維が発明されて以来、繊維生産に占める化学繊維の割合が増加している。近年は、先進国を中心に新繊維の開発も進められ、強度や耐久性などにすぐれる炭素繊維は、航空機や人工衛星の部品など、幅広く使用されている。

石油精製・石油化学工業 石油化学工業の立地は、油田地帯であるペルシア湾岸などの原料産地のほか、市場近郊の原料の輸入に便利な臨海部となる。先進国では、オランダのユーロポルト

やアメリカ合衆国のヒューストン、日本の太平洋ベルトなどの臨海部に立地する。日本では、鹿嶋・川崎・水島(倉敷)・大分のように石油化学と鉄鋼の双方のコンビナートが立地する都市もみられる。油田から産出された石油は、原油のまま輸出されるほか、産油国の精製所で石油化学工業の原料となるナフサなどに加工されて輸出される。さらに、エチレンなどに加工されたあと、プラスチックや化学繊維、合成ゴムといった石油化学製品が生産される。

リード

図①やp.146図②、p.147図③からは、工業の種類によっておもな生産国が異なることがわかる。各種工業の特徴やその変容をとらえよう。

品名	世界計	中国	インド	インドネシア	タイ	ベトナム	フィリピン	マレーシア	バングラデシュ
繊維(2012年)	4900万t	24.4%	2.6%	14.0%	1.6%	1.4%	1.1%	1.1%	1.1%
繊維(2012年)	45・1597万t	33.2%	27.1%	19.2%	1.8%	1.1%	1.1%	1.1%	1.1%
化学繊維(2013年)	559万t	66.1%	7.1%	14.1%	1.1%	1.1%	1.1%	1.1%	1.1%
ナフサ(2013年)	2570万t	25.7%	13.1%	42.2%	1.1%	1.1%	1.1%	1.1%	1.1%
エチレン(2013年)	2259万t	18.0%	11.7%	47.3%	1.1%	1.1%	1.1%	1.1%	1.1%
ポリエチレン(2013年)	893万t	17.5%	11.6%	50.7%	1.1%	1.1%	1.1%	1.1%	1.1%

▲おもな繊維製品の生産国(繊維ハンドブック2015)

品名	世界計	中国	インド	インドネシア	タイ	ベトナム	フィリピン	マレーシア	バングラデシュ
ナフサ(2013年)	2570万t	25.7%	13.1%	42.2%	1.1%	1.1%	1.1%	1.1%	1.1%
エチレン(2013年)	2259万t	18.0%	11.7%	47.3%	1.1%	1.1%	1.1%	1.1%	1.1%
ポリエチレン(2013年)	893万t	17.5%	11.6%	50.7%	1.1%	1.1%	1.1%	1.1%	1.1%

▲おもな石油化学製品の生産国(経済産業省資料、ほか)

p145



続きは次ページへ

本文・図版の連動と整理された展開で、さらに理解しやすい「系統地理」！ 各種工業の成因や特徴を充実させた説明で、変容する工業がより深く理解できる

p.146-147

NEW!



▲おもな国・地域の鉄鋼の生産と貿易(2013年)(鉄鋼統計要覧 2014) 鉄鋼 日本は輸出先はどこだろうか。



▲おもな国・地域の自動車の生産と貿易(2012年)(世界自動車統計年報 2014) 自動車 輸出入の多い国をあげよう。

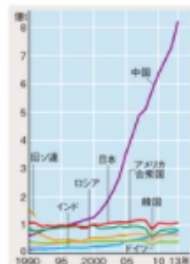


▲自動車の生産に使用される鋼材(中国、シャンハイ(上海)、2011年撮影)

鉄鋼業 鉄鋼業は、製品よりも原料が重いので原料産地を指向した立地となる。産業革命以降、イギリスのミッドランド地方やドイツのルール地方など、炭田地域を中心に発達してきた。しかし近年は、国内原料の枯渇と高コスト化、安価な輸入原料への依存などにより、先進国では輸入に便利で、かつ市場に隣接した大都市近郊の臨海部に立地する傾向がある。フランスのフォスや日本の君津、水島(倉敷)などがその例である。一方、発展途上国では中国のアンシャン(鞍山)やインドのジャムシェドプルのように、現在でも原料となる鉄鉱石の産地に立地することが多い。

鉄鋼業は、大規模な生産設備が必要なため、設備投資額も巨額になる。アメリカ合衆国やEUでは、設備の老朽化などにより競争力が低下し、現在では、生産の中心は東アジアに移っている。中国では、今世紀に入って工業用・建設用の鋼材需要が急増し、生産が増大した。日本は、世界第2位の鉄鋼生産国で、自動車用の薄板など付加価値の高い高級鋼材において高い競争力をもつ。

電気機械工業 電気機械工業は、エアコンや冷蔵庫、テレビ、パソコンなどの家電や、発電機やエレベーターなど産業用の電力機器(重電)など、多種多様な製品を製造する工業である。家電の組み立ては流れ作業で行われ、労働集約的な側面が強いため、輸出指向型の工業化を進めた中国や東南アジアで生産量が増加している。日本は、1990年ごろまで家電の世界的な生産国であったが、現在は開発や高級モデルの製造などを残すのみで、生産



▲おもな国の鉄鋼生産の推移(鉄鋼統計要覧 2015, ほか) 鉄鋼 中国の生産量の変化を読み取ろう。

分布・特徴

変容

分布・特徴

機能の多くはアジアの新興工業国に移った。近年では、それらの国々の所得水準の上昇を受けて、現地工場による現地市場向けの製造も増えている。一方、重電の生産は先端技術と関連産業の発展が求められるため、現在でも先進国が立地の中心である。

自動車工業 自動車工業は約3万点の部品を組み立てる総合組立工業であり、それらの部品は、機械、石油化学、鉄鋼、電気機械などの各工業によって生産される。自動車工業の発展には、幅広い関連工業の発達も不可欠であるため、アメリカ合衆国、日本、ドイツなどの先進国に本拠をおく自動車メーカーが依然として高い国際競争力を誇っている。日本の自動車メーカーは1980年代から積極的に海外に進出し、さまざまな車種・部品の生産を各国・地域で分担する国際分業を進展させた。近年は、新興国での需要の伸びに伴い、先進国の自動車メーカーが現地に進出し、それらの国々の生産台数が急増している。とくに、中国の伸びは著しく、世界最大の自動車生産国になっている。

今日、環境意識の高まりから、多くの国で自動車の排ガス規制が強化されている。これに対して、ハイブリッド車の実用化や電力・水素などの新たな燃料を用いる自動車の開発が進められている。また、衝突回避機能など、安全性を高めた車種の生産も始まっている。

20 多国籍企業は、そうした付加価値の高い自動車の生産・販売を先進国で進める一方、新興国では価格の安さを重視し、機能をしばらく込んだ新興国向けの自動車を投入する戦略をとっている。

変容

国	世界平均	2013年
中国	27.3%	12.1%
アメリカ合衆国	25.1%	11.0%
ドイツ	15.5%	10.0%
日本	13.3%	9.0%
インド	11.0%	8.0%
フランス	10.0%	7.0%
韓国	9.0%	6.0%
ブラジル	8.0%	5.0%
イタリア	7.0%	4.0%
ロシア	6.0%	3.0%
インドネシア	5.0%	2.0%
オーストラリア	4.0%	1.0%

分布・特徴

国	世界平均	2013年
中国	27.3%	12.1%
アメリカ合衆国	25.1%	11.0%
ドイツ	15.5%	10.0%
日本	13.3%	9.0%
インド	11.0%	8.0%
フランス	10.0%	7.0%
韓国	9.0%	6.0%
ブラジル	8.0%	5.0%
イタリア	7.0%	4.0%
ロシア	6.0%	3.0%
インドネシア	5.0%	2.0%
オーストラリア	4.0%	1.0%



▲おもな国の自動車生産の推移(世界自動車統計年報 2015)

チェック
各種工業の特徴と変化を説明しよう。

図法を統一した地図で
一目で特徴が見える
ように整理!

各工業の生産、貿易について、現在生産が多い地域や、貿易の流れが比較でき、特徴が一見してつかめます。

本文でも各種工業を
比較することで特徴を
理解できます!

各種工業を比較できるように、分布・特徴・変容の観点を必ず記載しています。また、多国籍企業による国際分業の進展により、先進国や発展途上国・新興国での各種工業が変容したようすがわかります。

本文・図版の連動と整理された展開で、さらに理解しやすい「系統地理」！ 「日本」の記述を充実し、最新情勢について積極的に記載

全ての系統地理の項目について、日本の現状が確認できるページを設置

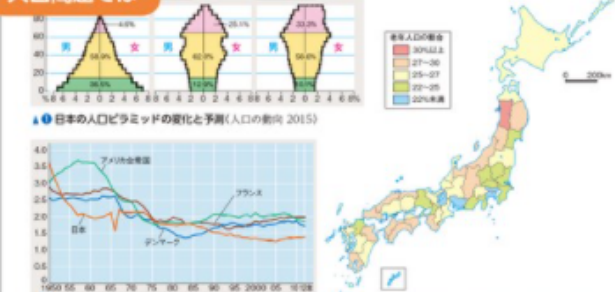
近年のセンター試験に頻出である「日本」についての項目を、すべての分野で設けています。最新の情勢を積極的に記述しており、客観的に日本の現状と最新の動向を知ること、世界の中での位置づけ、役割をしっかりと学べます。

「日本」についての項目がある箇所 (計 14 か所)

- p.76-77 日本の地形
p.78-79 日本の気候
p.80-81 開発に伴う災害と防災
p.92 日本の環境問題
p.110-111 日本の農林水産業
p.116 日本の食料問題
p.133-134 日本の資源・エネルギー問題
p.149-151 日本の工業
p.157 日本の観光産業
p.167 日本の貿易の現状と課題
p.176-177 日本の人口問題
p.198-199 日本の都市・居住問題
p.205 日本の衣食住
p.223-225 日本の領土をめぐる問題と外国人との共生

p.176

人口問題では



日本の人口ピラミッドの変化と予測(人口の動向 2015)
合計特殊出生率の推移(国立社会保障・人口問題研究所)
日本の合計特殊出生率は、他の先進国と比べてどのような特徴があるだろうか。

リード
国を比べると、日本では今後少子高齢化がさらに進行していくことが予測される。こうした社会ではどのような問題が生じるかをとらえていこう。

4 日本の人口問題

急速に進む少子高齢化
明治時代以降、日本では出生率が死亡率が低

平均寿命の伸びとあわせて、少子高齢化が進行し、1997年には老年人口が年少人口を上まわった。2005年からは人口が減少に転じ、今後、日本の人口は継続して減少することが予想される。

日本では、ほかの先進国国と比べて高齢化が急速に進行してきた。老年人口割合は1970年に7%に達して高齢化社会となり、さらに1994年には14%に達して高齢社会となった。すなわち、日本の老化年数はわずか24年である。ただ、少子高齢化には著しい地域差がみられる。東京をはじめとする大都市圏には、地方から労働力が流入して人口が集中し、過密の問題が生じている。大都市圏では生産年齢人口が多く、一般に老年人口の割合は低い。一方、山間地域や離島などでは労働力が流出して過疎地域となっており、少子高齢化の問題はとくに深刻である。

高齢化への対応と課題
日本ではほかの先進国と比べて少子高齢化の進行が速いため、高齢社会への対応が遅れている。年金制度の改革や介護保険の導入などの施策は、多額の費用を必要とす

p.198

都市・移住問題では



ドイツと日本の政治・経済機能の分布の傾向(FINANCIAL TIMES, ほか)
東京圏への集中(住居基本台帳人口調査 平成 25 年度, ほか)

リード
日本では、東京や大阪のように東京への一極集中が進んでいる。これらの大都市圏には金銭・情報など多くの都市機能が集中し、雇用の機会も多い。なかでも首都の東京は、中枢管理機能や資本の集中・集積の程度がとくに高く、一極集中が進んでいる。数多くの機能が1か所に集中すると、それだけ情報量も多くなり、便利ことが多い反面、人口過密や地価高騰などの問題を引き起こし、生活環境の悪化も招く。世界には、一極集中による問題を緩和するため、首都機能の移転を実施した国もみられる。また、ドイツのように、首都ベルリンのほか、フランクフルトやミュンヘン、デュッセルドルフ、ボンなど、複数の都市に政治や経済の機能を分散させている国もある。

4 日本の都市・居住問題

東京への一極集中
日本では、東京・名古屋・大阪の三大都市圏に人口が集中している。これらの大都市圏には金銭・情報など多くの都市機能が集中し、雇用の機会も多い。なかでも首都の東京は、中枢管理機能や資本の集中・集積の程度がとくに高く、一極集中が進んでいる。数多くの機能が1か所に集中すると、それだけ情報量も多くなり、便利ことが多い反面、人口過密や地価高騰などの問題を引き起こし、生活環境の悪化も招く。世界には、一極集中による問題を緩和するため、首都機能の移転を実施した国もみられる。また、ドイツのように、首都ベルリンのほか、フランクフルトやミュンヘン、デュッセルドルフ、ボンなど、複数の都市に政治や経済の機能を分散させている国もある。

都市の地域格差
現在では、都市と農村の間ばかりではなく、大都市と地方都市との間にも地域格差が広がっている。一般に、地方の中小都市では、大都市に比べて雇用の機会が少なく、労働人口の大幅な伸びは期待できないため、大都市に出て行く若者が増え高齢化も進んでいる。人口の減少と高齢化は、同時に経済活動の停滞を招き、かつてにぎわいをみせた駅前や街なみ全体がさびれる事態も起きている。地方都市の商店街のなかには、昼間からシャッターが閉められ、営業をしていない店も少なくない。一方で、高知県四万十市や大分県竹田市のように、空き店舗を新規事業者に安価で貸し出したり、活用・交流の場として活用したりすることで、新づくりと一体となった商店街の活性化をめざす動きもみられる。



商店街で閉められるシャッター(大分県、竹田市, 2013年撮影)

p.157

観光産業では

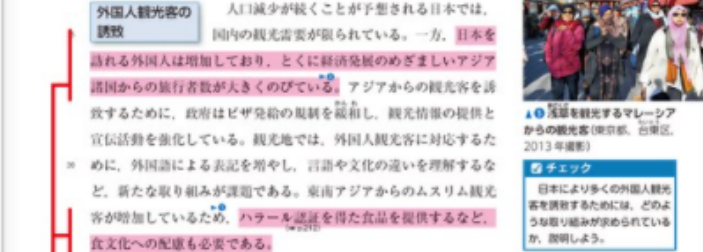


日本の世界遺産と世界ジオパーク(ユネスコ資料)
観光客にぎわう観光地(群馬県、富岡市, 2014年撮影)
2014年に世界文化遺産に登録されたことで観光客が急増した。経済効果が期待される一方で、建造物の保全や、観光客の増加による環境への影響も大きい。

3 日本の観光産業

日本の観光産業
日本では、昔から奈良や京都などの古都、別荘や温泉などの温泉、箱根などの史跡を訪れる観光に人気があった。学校では教育の一環として修学旅行が続けられてきた。高度経済成長を経験して豊かになると、日本人の観光行動は多様化した。北海道や東北地方などのスキーリゾートは、若者を中心とした観光客を引きつけた。1990年代には、地域振興を目的として、各地にテーマパークが建設された。しかし、スキー客は1990年代半ばごろをピークに減少し、テーマパークの経営も必ずしも成功しているわけではない。一方、各地の地方自治体は、街づくりと地域振興を目的として、伝統的な街並みの保存や観光施設の整備に取り組んでいる。中山道の宿場町が復元された妻籠や、蔵づくり建物が残る川越は、人気の高い観光地である。また、世界遺産の登録やジオパークの認定は、観光産業を促進する要因である。

外国人観光客の誘致
人口減少が続くことが予想される日本では、国内の観光需要に限られている。一方、日本を訪れる外国人は増加しており、とくに経済発展のめざましいアジア諸国からの旅行者数が大きく伸びている。アジアからの観光客を誘致するために、政府はビザ発給の規制を緩和し、観光情報の提供と宣伝活動を強化している。観光地では、外国人観光客に対応するために、外国語による表記を増やし、言語や文化の違いを理解するなど、新たな取り組みが課題である。東南アジアからのムスリム観光客が増えているため、ハラール認証を得た食品を提供するなど、食文化への配慮も必要である。



外国人観光客の誘致(東京都、台東区, 2013年撮影)
日本により多くの外国人観光客を誘致するためには、どのような取り組みが求められているか、説明しよう。

人口の減少と大都市圏の過密という、現代日本が抱える人口問題について記述しています。

都市の地域格差と、今後に向けた対応について記述しています。

観光産業の現状と、さらなる発展に向けた取り組みについて記述しています。

本文・図版の連動と整理された展開で、さらに理解しやすい「系統地理」！ 本文をさらに深める別角度の視点や最新の事例をコラムで紹介

トピック

多様なテーマを本文とは異なる切り口で紹介

- ①多様な具体事例を別角度の視点から見るコラムとして、学習内容を補完しています。
- ②世界の最新動向に焦点をあてたテーマをとりあげ、系統的理解を助けます。

トピック 掲載箇所一覧

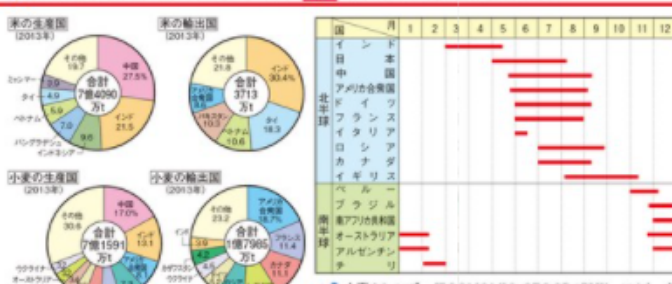
津波への備え……………33	日本近海の海底資源……………134
縄文海進によって形成された沖積平野……………38	世界に広がるLED照明……………151
サンゴ礁……………41	コンビニと物流システム……………154
ジェット気流の蛇行……………53	日本におけるLCCの導入と課題……………159
エルニーニョ現象・ラニーニャ現象……………75	直面される公共交通機関……………196
都市の災害対策……………81	ハラール認証とムスリム……………212
世界の農業を動かす穀物……………106	難民問題……………222
まぐろの完全養殖……………111	津波が発生するしくみ……………327
水資源で結びつく世界……………126	
バイオエタノールの課題……………132	

四大穀物を整理立てて紹介

p.106-107では、世界の主な穀物を、「米」・「小麦」と「とうもろこし」・「大豆」に分けて紹介しています。基礎から現状まで、四大穀物の特徴が体系的につかめます。

p.106-107

トピック 世界の農業を動かす穀物



▲米・小麦の生産地と輸出入 (FAOSTAT)

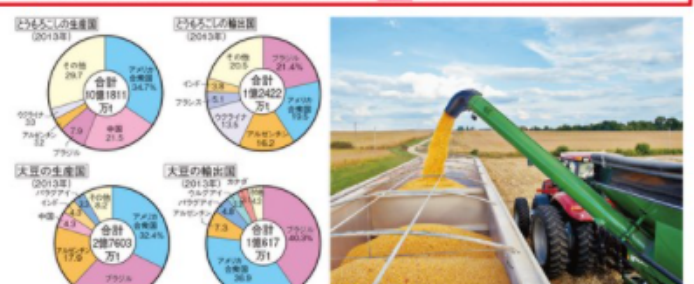
世界各地で主食とされる米と小麦

[1] 米 穀物のなかで単位面積あたりの収穫量が最大であり、栄養も豊富で食料としてすぐれている。稲の生育には高い気温と多量の水が必要である。植え付け時期には多量の灌漑用水を必要とし、生育期間の2～3か月の平均気温が20℃をこえる地域が稲作の好適地となる。また、灌漑のための低平な耕地が適し、おもに沖積平野で栽培されている。主要産地であるモンスーンアジアでは、米を主食とする人々が多く、小規模な水田がおもに家族労働により耕作される。収穫量の大半が国内で消費され、輸出されるのは生産量のわずか数%にすぎない。

[2] 小麦 生育期に寒冷で湿潤、成熟期に温暖で乾燥する気候が生育に適する。秋に種をまき初夏に収穫する冬小麦が多いが、冷涼な地域では春に種をまき秋に収穫する春小麦の栽培も行われる。春小麦と冬小麦、また北半球と南半球とで収穫期が異なるため、年間を通して世界のどこかで収穫されている。小麦はパンやパスタなどの原料になる小麦粉として使われる。米と比較すると国際商品としての性格が強く、全生産量の約3割が輸出向けられる。小麦の主要輸出国での生産は、大型農業機械を用いた企業的经营により、きわめて大規模に行われている。

概要をつかむための資料

同じ図法の地図で比較できます。穀物の生産の分布や流通の特徴を理解できます。



▲とうもろこし・大豆の生産地と輸出入 (FAOSTAT)

需要が高まるとうもろこしと大豆

[1] とうもろこし 原産地は中央・南アメリカで、ヨーロッパやアジアには大航海時代以降に伝わり、米・小麦とともに世界の三大穀物の一つに数えられる。中米など、とうもろこしを主食としている地域もあるが、世界の主要産地で生産・輸出されるものの多くは飼料用で、全生産量の1割強が輸出向けられる。コーンスターチ(でんぷん)やコーン油などの食品にも加工されている。近年は、世界有数の生産・輸出国であるアメリカ合衆国で燃料用バイオエタノールの需要が高まり、農地を大豆畑などからとうもろこし畑に転換する動きもみられる。

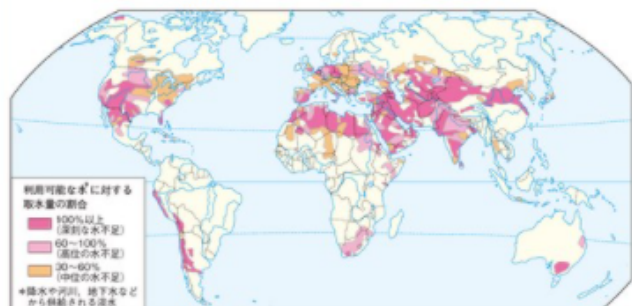
[2] 大豆 原産地は中国付近だが、20世紀以降に南北アメリカ大陸で生産が拡大し、今日ではアメリカ合衆国、ブラジル、アルゼンチンで、全生産量の約8割、全輸出量の約9割を占める。たんぱく質や脂肪を多く含む「畑の肉」とも称される大豆は、日本では食品や、みそ・しょうゆなどの調味料の原料としてなじみがある。世界的みると、搾油して大豆油をつくり、しばりかすを配合飼料に用いるのが一般的である。近年、巨大な人口を抱える中国の経済成長などで世界の植物性蛋白質需要が拡大し、ブラジルやアルゼンチンでの生産が急増している。

人間の生存に必要な水資源に言及

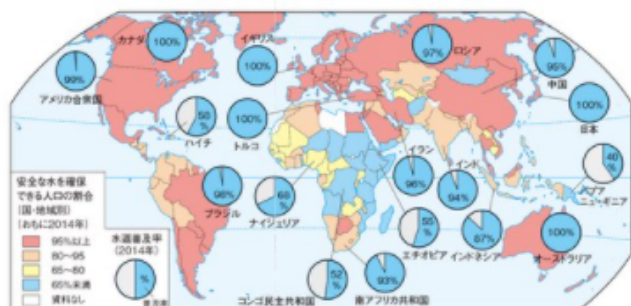
p.126 では水資源をめぐる現状と課題について、p.127 では今求められる活動や現在行われている取り組みについて、それぞれ地図や写真を有効に活用しながら記述しました。

p.126-127

トピック 水資源で結びつく世界



▲ 水不足が心配される地域 (Smakhtin, Revenga, DOE リサーチレポート 2004) おもにも中緯度の乾燥地域に広がっているが、アメリカ合衆国中西部や中国の華北など、農業用水の需要が多い地域にも分布する。



▲ 安全な水を確保できる人口の割合・地域別割合とおもな国の水道普及率 (World Development Indicators Database) [図説] 安全な水を確保できる人口が半数に満たない国・地域は、どこにかたよっているだろうか。



▲ ④ 農業の中につくられたトマト畑での収穫 (サウジアラビア) 畑が円形に見えるのは、センターピット方式 (→巻 2) とよばれる乾燥地ならではの灌漑方法を採用しているためである。こうした灌漑農業には、海水から抽出された淡水など大量の農業用水が利用される。



▲ ④ 水道技術者に浄水施設の維持管理を指導する北九州市の職員 (カンボジア、2013年撮影)

[1] 世界の水資源をめぐる現状と課題
地球は水の惑星とよばれ、地球上には多くの水が存在するが、淡水量はさきわめて限られている。人間が生存するためには飲料水が不可欠であり、食料生産のためにも淡水が必要である。人口増加に伴い、世界における水の需要は増え続けているが、多くの地域で慢性的な水不足が広がっている。水資源は豊富にあり、ひとたび干ばつが起これば、水不足が深刻化する地域も多い。降水量と森林に恵まれた日本は水資源の豊富な国であり、稲作はそれを基盤に発展してきた。そして、人口増加、生活様式や産業構造の変化により、水の使用量は増大してきた。

[2] 安全な水を確保するために
人間の生存のためには、安全な水の確保が重要である。世界人口の9割にあたる人々は改善された飲料水資源を利用できるようになっているが、おもにサハラ以南のアフリカやアジアなどの発展途上国では、いまだ7億人余りが安全な水を使えないままである。とくに農村部では上水道の整備が遅れているため、日常的に飲む水でさえ、遠くから井戸や川までくみ取り、煮沸消毒をしなければならない地域も多い。また、処理されない下水が河川や地下水を汚染し、それが畜産や森林など、感染症を引き起こす原因となっている。

水の持続的な利用は、世界共通の課題となっている。農業における水の安定供給は、食料問題の解決にもつながる。また、経済発展に伴う水質汚濁への対策も求められる。こうした水資源をめぐる問題を解決するために、日本を含めた先進国が果たす役割は大きい。例えば、日本の伝統的井戸掘り技術を発展途上国の農村に伝える活動が、NGOによって行われている。また、乾燥地域では、日本など先進国の先端技術を導入して、海水から淡水を生産する事業も進められている。さらに北九州市のように日本の地方自治体と企業が協力して、水の処理や水道技術を海外に輸出する取り組みも広まっている。

地域を見る目

注目すべき地域について、最新の事例を紹介
本文の記述と「地域を見る目」とをあわせてみることで、概論と各地域の具体事例の両面から、学習内容をより深く理解できます。

地域を見る目 掲載箇所一覧

水河湖決壊の危機が迫るブータン	85	民族・領土をめぐる対立	
インドネシアにみる熱帯林の保全	87	〜パレスチナ問題を例に〜	218
サヘルに砂漠化防止への取り組み	89	シリア内戦とISLをめぐる問題	220
石炭依存と環境保護にゆれるポーランド	91	多民族・多文化社会のオランダ	221
トルファン盆地の灌漑農業	97	台湾の発展	239
観光産業と共存するアルプスの農業	99	北朝鮮の動向	243
フィードロットの新しい課題	101	イスラームに合う国づくりへの動き	268
急増する南アメリカの大豆生産	104	ルワンダの復興と発展	272
石油化学工業が発達したロッテルダム	141	EUにおける多文化の共生	281
ポスト BRICS として注目されるベトナム	143	EUと環境・エネルギー政策	285
インドにみる人口抑制の取り組み	173	EUとトルコ加盟問題	287
デマールにみる高齢化の取り組み	175	ロシアとヨーロッパの関係をめぐるクライシス	291
高山都市メキシコシティにおける都市環境	194	ヒスパニックとアジア系移民の増加	297
早くから発生したロンドンにおける都市問題と再開発	197	産学協同で発展するシリコンヴァレー	304

フィードロットの新しい課題
肉用牛の生産は100年に及ぶが、従来の子牛はほぼすべて肉用として出荷されてきたが、近年は肉用と乳用を兼ねた品種が注目され、肉用牛の生産も減少している。肉用牛の生産は、肉用牛の生産と乳用牛の生産の両方を兼ねた品種が注目され、肉用牛の生産も減少している。

ベトナムへ輸出した日本企業の電子部品工場 (ベトナム、2011年撮影)

ベトナムへの日本企業の輸出と経済発展の相関関係を示すグラフ。2000年から2010年までの期間に、輸出額は約100億ドルから約300億ドルへと増加している。一方、GDPも約100億ドルから約300億ドルへと増加している。これは、日本企業の輸出がベトナムの経済発展に大きく貢献していることを示している。

「日本との結びつき」を新設！世界の諸地域の様相が一層わかる

全 11 地域で新コーナーを掲載！

各地域の様相がわかる

「日本との結びつき」を通して見ることで、いきいきとした世界の諸地域の姿がより具体的に理解できます。

世界の中で日本が果たす役割がわかる

グローバル化の中で日本が世界各地と政治的・経済的に深く結びついていることを、貿易や人・文化の交流など、共通なテーマを含めた様々なテーマを通じて理解できます。

日本との結びつき 一覧

人や物で緊密に結びつく日本と中国	p.241
相互理解をめざす日本と韓国	p.246
ますます身近になる東南アジア	p.255
関係強化が期待される日本とインド	p.262
資源と人の交流でつながる日本と西アジア・中央アジア	p.269
新たな関係を模索する日本とアフリカ	p.276
産業と文化で結びつく日本とヨーロッパ	p.288
日本海をはさんだ隣国である日本とロシア	p.294
経済・政治の重要なパートナーであるアメリカ合衆国	p.307
歴史的に関係の深い日本とラテンアメリカ	p.315
物や人の交流を深める日本とオセアニア	p.323

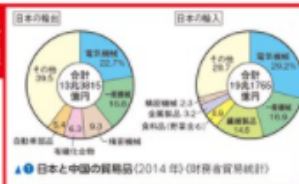
p.241

NEW!

日本との結びつき

人や物で緊密に結びつく日本と中国

共通

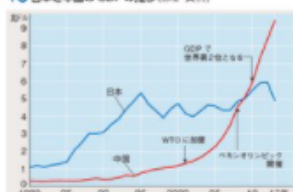


▲ 日本と中国の貿易額 (2014 年) (財務省貿易統計)

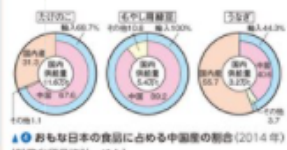


▲ 中国から日本に輸出される野菜 (中国、チョーチン (出口) 派, 2011 年撮影)

▼ 日本と中国の GDP の推移 (3ヶ国資料)



▲ 中国から日本に輸出される野菜 (中国、チョーチン (出口) 派, 2011 年撮影)



▲ おもな日本の食品に占める中国産の割合 (2014 年) (財務省貿易統計, ほかに)

緊密な貿易 2007 年以來、日本にとって中国は最大の貿易相手国である。日本は食品品、洗濯機や冷蔵庫などの家電、衣服、雑貨など多くの製品を中国から輸入している。その一方で、さまざまな工業製品をつくるための機械や、中国で生産される自動車や電気製品の部品・材料は日本から輸出されたものも多く、両国の産業は緊密に結びついている。中国で活動する日系企業は 5 万社をこえており、その駐在員などとして中国に住む日本人も 13 万人以上である。近年は、中国の経済成長に伴い、日本の小売業や外食産業などのサービスの中国への進出も増えている。今後は、観光や教育、医療、福祉などのサービスに対する需要も高まると見込まれている。

日本の食を支える中国産の野菜 中国産の野菜は、生鮮野菜としてスーパーマーケットに並ぶほかにも、冷凍野菜やカット野菜、乾菜野菜などに加工されて日本に輸入されている。冷凍食品など加工食品の材料として使われることも多い。中国では、豊富な労働力と広大な耕地を生かした大規模農業が行われ、低コストで野菜が生産されている。そのため、中国産の野菜は日本産の野菜よりも低価格で取り引きされ、日本市場に

なくてはならない存在となっている。

さかんな人の交流 中国から日本への留学生は 7 万人をこえて、日本に滞在している留学生の半数を占めている。卒業後に日本で就職する人も多く、日本で就職した中国人が、両国間の企業進出に重要な役割を果たす例も増えている。また、富裕層を中心に日本各地への観光客も増えている。近年は、買い物か目的で訪日する人も多く、とくに日本製の化粧品や化粧品に対する人気が高い。日本では中国人観光客向けのサービスが拡大しており、商店では中国の銀行カードを使えるようになり、中国語が話せる販売員を雇ったりするなどの動きがみられる。

2 冊 東アジア 241

日本と中国の貿易による結びつきだけでなく、中国から日本への留学や両国間の企業進出など、人的交流の新しい動きを様々な面から捉えてい

p.276

NEW!

日本との結びつき

新たな関係を模索する日本とアフリカ

共通



▲ 日本の JICA による協力で建設された小学校で学ぶ子供たち (ニジェール、ニアメジヨ)



▲ ウガンダの公立病院で使用される日本企業のアルコール消毒剤 (ウガンダ、2013 年撮影) 同地で生産されるさとうきびを材料に、日本の技術や品質管理の手法を生かしてアルコール消毒剤を生産している。医療機関での衛生管理改善や院内感染防止に役だてると同時に、市場の拡大をめざす、BOP ビジネスの一環である。



▲ 日本とアフリカの貿易額 (2015 年) (財務省貿易統計)

日本とアフリカの貿易 日本人の生活のなかには、カカオやコーヒーだけでなく、タコや白身魚、グレープフルーツ、バナナなど、アフリカからの輸入にたよっている農水産物が多い。スマートフォンやハイブリッド車の生産には、アフリカで生産されるレアメタルが不可欠である。日本のアフリカからの輸入は、こうした一次産品が中心である。一方、日本からアフリカへは、アフリカ諸国の経済成長による自動車需要の増加を受けて、新車や中古の乗用車、トラック、自動車部品などが多く輸出されている。

日本のアフリカへの支援 日本にとって、アフリカからの農水産物や鉱産資源を安定的に輸入することは重要であるが、アフリカには貧困や内戦など、多くの課題を抱えている国が多い。そこで、日本政府は、ODA や NGO、国際協力機構 (JICA) などを通じて、さまざまな支援を続けており、その分野は教育や保健医療、輸送イ

ンフラの整備、貧困削減、平和構築、環境保全など、多岐にわたる。個人の生存を重視する「人間の安全保障」の考えの下、タンザニアにおける農村開発、ウガンダにおけるネリカネの栽培指導、ニジェールにおける学校建設や教育システムの開発などを、日本人が現地で主導して行っており、今後のアフリカ社会を担う人材の育成にも力を入れている。

アフリカへの日系企業進出 アフリカへの日系企業の進出は、南アフリカ共和国での自動車製造や鉱山開発など、製造業や資源関連産業が中心であったが、2000 年代以降、消費市場の拡大により、化粧品や家電製品、調味料や食品など食料品の分野においても増えてきている。また近年では、発展途上国の低所得者を対象とした BOP ビジネスの支援も行われており、日本企業の技術協力により、蚊帳や乳幼児向け栄養食品、アルコール消毒剤などの普及が進められている。

276 2 冊 現代世界の諸地域

日本とアフリカの貿易によるつながりだけでなく、日本からの ODA や NGO が、アフリカが抱える課題の解決に寄与していることがわかります。

「日本との結びつき」を新設！世界の諸地域の様相が一層わかる

NEW!

p.262

日本との結びつき

関係強化が期待される日本とインド

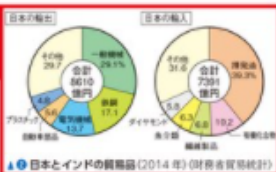


インドに進出した日系自動車メーカーの工場（アリアー、2014年撮影）

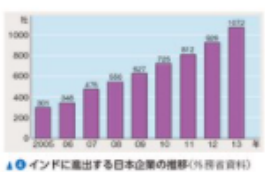


アリアー近郊に立地する日系自動車メーカー（筆者撮影）

共通



日本とインドの貿易額（2014年）（財務省貿易統計）



インドに進出する日本企業の増減（財務省資料）

日本とインドは1952年に国交を樹立し、インドの強い親日感情にも支えられながら友好関係を維持してきた。日本の高度経済成長期には、インドからの安定した鉄鉱石の供給が工業生産に大きな役割を果たした。現在の両国の経済関係は、その経済規模を考えれば限定的であるが、徐々に拡大している。かつては、日本がインドへ工業製品を輸出し、インドからは鉄鉱石などの原料を輸入するという典型的な先進国と発展途上国間の貿易構造であったが、インドの工業化が進み、揮発油などの付加価値の高い石油製品の貿易額が増えている。

写真①は、日本の自動車メーカーとインド政府との合弁企業の工場で、1983年にアリアー郊外で自動車生産を開始した。同社の小型乗用車は、安価で低燃費、快適な走行を評価され、1980年代後半に

はインドの乗用車市場の8割以上を獲得した。それ以来、インドに進出する日本企業が増え、アリアーやその近郊には、複数の日系企業が乗用車や自動車二輪車の組立工場を設立している。一方、ICT技術者の需要が高まった2000年代以降は、日本で働くインド人技術者も増えている。近年は、自動車産業やICT産業をはじめ、さまざまな分野で両国の技術者の往来が増えている。

原油の多くを西アジアからの輸入にたよっている日本にとって、インド洋シーレーン（海上交通路）の安全保障は重要な課題である。エネルギー資源の安定確保の観点からもインドとの関係強化が期待される。1990年代半ばには、インド政府が日本を含む東・東南アジアを重視する「ルックイースト」政策を打ち出したこともあり、日本とインドの政治・経済の連携強化が進められている。

NEW!

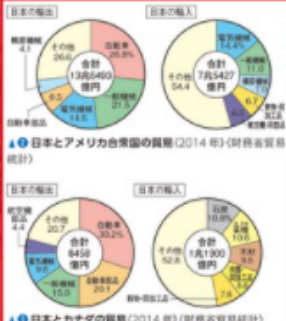
p.307

日本との結びつき

経済・政治の重要なパートナーであるアメリカ合衆国



日本に進出したアメリカ合衆国のテーマパーク（大原市、大原市、2013年撮影）（ユニバーサル・スタジオ・ジャパン）ハリウッド映画の世界を体験できるアトラクションが人気を集めている。



日本とアメリカ合衆国の貿易額（2014年）（財務省貿易統計）

共通

日本はアンダロアメリカと産業や貿易で強く結びついている。とくにアメリカ合衆国は、2006年に中国に抜かれるまで、長らく日本の最大の貿易相手国であった。日本はアメリカ合衆国から電気機械・航空機などの工業製品、とちろこし・小麦などの穀物類を輸入し、自動車や機械類を輸出する。日本貿易は不均衡で、日本の輸出額が日本の輸入額を大きく上回る。1980年代には、おもに自動車が多量輸出となり、貿易摩擦が深刻化した。そのため日本の自動車メーカーは、アメリカ合衆国に工場を建設し、現地の住民を雇用して現地生産を始めた。ミシガン州やオハイオ州などの五大湖周辺に加えて、ケンタッキー州、テネシー州など産地がもたらした。一方、日本とカナダとの貿易をみると、カナダからは石炭などの鉱産資源、木材や木材、豚肉などの農林産品の輸入が多く、日本からは自動車や機械類の輸出が多い。また、国際的な政治や安全保障に強大な影響力

をもつアメリカ合衆国は、政治においても、日本と強く結びついている。1950年代に締結された日米安全保障条約にもとづいて、日本の各地に米軍基地がおかれている。とくに沖縄の米軍基地は、アジア・太平洋地域の安定に重要な役割を果たすが、住民の生活や産業に大きな影響を及ぼしている。アメリカ文化は、日本を含めて世界中に浸透し、私たちの生活に大きな影響を与えている。ハンバーガーなどのファストフードや、ジーンズなどの服装、大規模なショッピングセンターに集約される大量販売・大量消費の生活様式は日本にも普及している。映画や音楽、スポーツ、テーマパークなどの娯楽も、若い世代を中心に、日本人の生活の一部になっている。ロサンゼルスにあるハリウッドは、世界的な映画製作の中心地として知られ、日本人を含めて、世界中から集まった人々が製作にかかわっている。大規模なテーマパークは日本にも進出しており、多くの人客を集めている。

NEW!

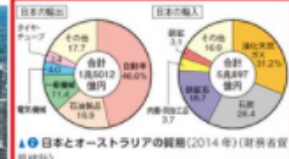
p.323

日本との結びつき

物や人の交流を深める日本とオセアニア



多くの日本人観光客が訪れるゴールドコースト（オーストラリア、2014年撮影）



日本とオーストラリアの貿易額（2014年）（財務省貿易統計）



小学校での日本語の授業風景（オーストラリア、ニューカスルフェリス大、2010年撮影）

共通

日本とオーストラリアの貿易額は、オセアニアの国々のなかでもとくにオーストラリアと日本とのつながりが強い。オーストラリアにとって、日本向けのおもな輸出品は、液化天然ガス・石炭・鉄鉱石・肉類などの一次産品であるのに対し、日本からの輸入品は自動車や機械類などの加工品が中心である。ただ、貿易面では、近年は中国の台頭により、日本の相対的な地位はやや低下してきている。オーストラリアと日本は、観光や教育に光や教育の分野での結びつきも強い。オーストラリアの海浜リゾートであるゴールドコーストやケアンズには、日本企業によって開発されたホテルやマンションがあり、定年後に移り住む日本人が増えている。一方、日本を訪れるオーストラリア人も2000年ごろからめだっている。おもな目的は北海道や長野県へのスキーで、日本はカナダやヨーロッパよりも近く、料金も比較的安い。温泉や日本食など、異文化に直接触れられるという点も、人気が高い理由である。このほか、ワーキングホリデー制度を利用

して、両国の若者がそれぞれ現地で働きながら、相手の国の生活や文化を直接体験する交流や、日本からの留学も活発に行われている。太平洋の島々をみると、ハワイ諸島やアダム島では日本人向けのリゾート開発が行われ、今や最もなじみの深い観光地となっている。タヒチ島やニューカレドニア島などフランス領の島々も、観光産業に力を入れており、日本からも多くの観光客が訪れる。多文化主義政策の下、多言語教育に積極的に取り組んできたオーストラリアでは、とくに2009年以降、アジア言語の教育に力を入れている。日本語は、インドネシア語、中国語などと並んで、人気の高い言語の一つである。これらの言語は、一般に公立の初等・中等教育機関で学習される。オーストラリアでは、日本語教育を受けた人は、現地に拠点をもち日本の産社や精密機器・電気関連企業での勤務が有利であると考えられている。また、鉱産・エネルギー資源や食肉・乳製品など、オーストラリアが得意とする一次産品関連の企業にも、日本語を話すことのできる社員が少なくない。

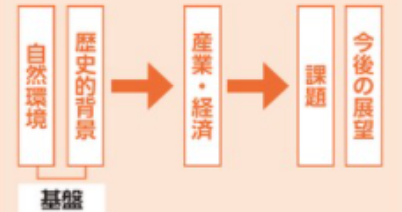
日本とインドの貿易の歴史的な経緯から、最新の情勢までを紹介しています。今後の日本とインドの関係の展望についても紹介することで、インドについてのより深い理解が図れます。

日本とアメリカ合衆国の貿易面での変遷・現状や、アメリカ文化の日本への影響だけでなく、日本企業や日本人がアメリカ経済の一翼を担って、アメリカ合衆国について

日本とオーストラリアの貿易面でのつながりだけでなく、観光や教育の面での結びつき（現地での日本語教育に関する具体事例など）を紹介することで、オーストラリアについてより深い理解が図れます。

地域についてよくわかる学習展開！
自然環境から今後の課題・展望まで踏み込んで記述！

学習の流れ



NEW!
特設
（日本との結びつき）

→本資料
p.24-27

自然環境や歴史的背景などの基盤を踏まえた学習により、地域の本質が見えてきます。さらに、今後の展望や課題、日本との結びつきまで記述し、より一層地域の理解が深まります。

世界の全地域を完全網羅

国際理解を深めるためには、世界地誌の学習は大切です。本書では、原則として州・大陸規模で取り上げることで、世界のすべての地域を学べます。



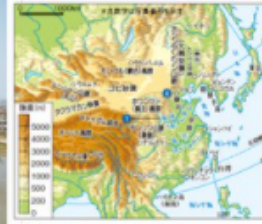
中国を例に
(p.232-241)

諸地域学習の基盤となる「自然環境」「歴史的背景」をまず学習！

系統ページへのリンクを随所に設けており、振り返りやすくなっています。

自然

2節 東アジア



東アジアの地形 (Diecke Weltatlas 2008, 44p)
ホワンフー(黄土)高原を流れる黄河(中国、シャンシー(山西)省)

●地域の考察方法 ● 東アジアは、第二次世界大戦後に急速に工業化が進んだ地域である。とくに近年は、中国の経済的発展が世界経済に大きな影響を及ぼしている。この節では、中国・韓国を中心に、民族や歴史など地域を構成するさまざまな要素を適切に整理して、考察していく。

プラス

オンドルとカン

朝鮮半島や中国の東北地方などは、伝統的な暖房設備がみられる。朝鮮半島ではオンドル(竈)は、もともと台所で薪の煙を床下全体に通して部屋を暖めるものであった。近年は、煙のかわりに電気で加熱したものが主流になっている。中国の東北地方ではオンドル(炕)は、床の一部を高くしてその部分に煙を通し、暖めるものである。オンドルとカンは類似しているが、造りの原理は異なる。



伝統的なオンドル(形式)

p.232-233

歴史



天安門広場(中国、ペキン(北京)) 1949年の中華人民共和国建国記念式典など多くの歴史的行事や事件の舞台となってきた。

1 中国の歩みと巨大な人口

●日本に影響を与えた文化 ● 中国では黄河流域と長江流域で古代文明が興った。黄河の流域は、農耕の民族の侵略や支配をたびたび受けたが、漢民族を中心とする中国文化が興り、継承されてきた。青銅器や鉄器の製造、はしの使用、稲作、漢字、仏教などの文化、茶やみかんをはじめとしたさまざまな農産物など、日本は中国から多くの文化を学んできた。

●社会主義経済から市場経済へ ● 第二次世界大戦後、国民党との激しい内戦を経て、毛沢東の率いる共産党が1949年に中華人民共和国を建国した。それ以来、中国は社会主義の道を進み、政府が経済全般を統制する計画経済のしくみを導入した。農村では、集団で農業や工場を営むとともに、行政、教育の機能をもった人民公社とよばれる組織がつけられた。しかし、計画経済の下で生産意欲の低下や生活水準の停滞に見舞われたため、1970年代後半から市場経済を取り入れ、外国からの投資も受け入れる経済改革、対外開放政策に転じた。経済に対する政府の介入を減らし、国内企業の経営の自主性を高めたり、民営化を進めたりした。また、集団農業をやめて個人の農家が自由に経営できるようにしたことや農業の生産性が大きく向上した。農村では家庭企業がさかんに設けられ、生産性の向上によって余剰となった労働力を吸収して成長した。

●2001年、WTOに加盟して国内の市場を大きく開放したことで、外国企業がさらに中国に進出した。2010年には、GDPでアメリカ合衆国についで世界第2位となった。

リード

多くの人口と民族を抱える中国の発展と人口増加の歴史をリード

リンク

発展途上の人口増加の歴史をリード

関連用語

●計画経済 政府が製品の生産計画を立案し、それに沿って企業や機関に生産を指示する経済のしくみ。製品も、政府の指令によって決定される。
●人民公社 行政や教育機能をもった農村組織。集団で農業を行う。1958年から10年代前半までは中国のほとんどが人民公社に組織されていた。
●市場経済 企業や農家がそれぞれの利益や需要をそれぞれで決めるしくみ。製品の価格は、それぞれの製品にそれぞれ、サービス、労働力、土地、企業なども売買の対象になる。
●家庭企業 農村の個人(家族)が経営する小規模な工場や商店。多くの農民が自分で小規模な工場や商店などを営む。農民たちが新たな成長を遂げることで大きく成長した。最近では都市に本社を移す企業も出てきており、農村との結びつきは薄れつつある。

自然

自然環境は地域植生のようなすがわかな自然環境について丁寧に記述しています。

学習の基盤です。地形や地図を設置し、地域の寧に記述しています。

歴史

各地域が現在の姿を形成する過程において、影響を与えた出来事を中心に記述した上で、年表でもまとめています。

農業や工業の発展など、地域の産業の特色がわかる！

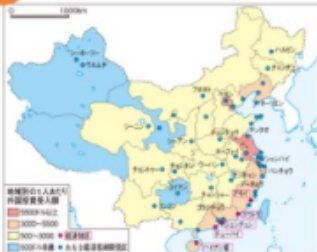
これまでの学習内容を背景に、地域が抱える課題がわかる！

これからの地域の姿が見えてくる！

「日本との結びつき」→本資料 p.20-23 **NEW!**

産業

p.237



1 経済特区・経済技術開発区と外国投資の受け入れ(2010年) (中国統計年報 2011, ほか) 2 パソコン工場(フォントウ(広東), 2012年撮影) 近年は、パソコンやスマートフォンなどの高性能の電子機器の生産も盛んでいる。

3 中国の工業化と巨大市場

世界の工場 中華人民共和国の成立以来、中国では多数の国有企業が設立され、豊富な鉱産資源を生かして鉄鋼、化学などの重化学工業が発展した。とくに「満洲国」の時代に日本が建設した炭鉱や製鉄所などが残っていた東北地方には多数の国有企業がつくられ、中国の重化学工業の中心になった。

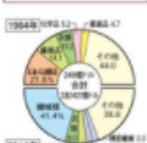
1970年代末に対外国開放政策が始まったのも、華中・華南の沿海部に経済特区や経済技術開発区が設けられた。これらの地域では外国企業に対する税が低く抑えられたため、外国企業は中国の安価で豊富な労働力と国内市場の可能性にひかれて積極的に投資した。外国企業の進出と中国企業の成長により、中国は自動車、パソコン、テレビ・エアコン・冷蔵庫などの家電、衣類・衣服など、多くの工業製品で世界最大の生産国となった。今日では、大量の工業製品を輸出するようになり世界の工場とよばれている。ビルや道路の建設に使用されるセメントの生産量では世界の約6割、鉄鋼の生産量では約5割を占めるなど、国内市場向けの工業の成長も著しい。また、コウントン(広東)省などの東南部には、パソコンや家電などの特定の産業に従事する中小企業が集まった産業集積地が数多く生まれ、安価な製品を大量に送り出している。

アメリカ合衆国やヨーロッパなどでは、拡大する中国からの輸入が域内の産業に与える悪影響を抑えるため貿易を制限する動きが出るなど、中国の工業の躍進は貿易摩擦をもたらすまでになっている。

3 リード 図p.238 図3から2010年と2015年の中国のGDPと人口の増加が読み取れる。このように中国の経済は、急激に伸びている。

リンク先 中国の工業化と貿易(2015)

4 都市問題 中国がまた都市経済中心であった。1979年に、外国企業に自由な経済活動を許す市場経済の実験地として設けられた。現在では、周辺地域と一体化した工業都市として発展を続けている。



4 中国の輸出の変化(LN Comtrade, 18年)

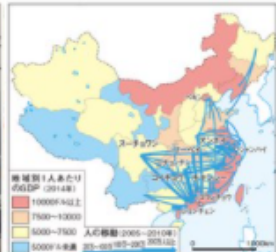
2 新 東アジア 237

産業

農業や工業、経済でも、人々の生活と関連付けて記述しています。例えば p.237 では、世界の工業と呼ばれる現状だけでなく、中国の工業の躍進がもたらした課題(貿易摩擦)にまで言及しています。

課題

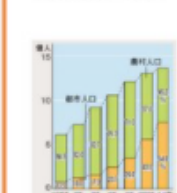
p.238



1 深刻な大気汚染と交通渋滞(ベキン(北京), 2014年撮影) 2 地域別1人あたりのGDPと人口の推移(中国統計年報 2015, ほか)



3 都市部と農村部の人口比率の変化(中国統計年報 2015, 18年)



4 都市部と農村部の人口比率の推移(中国統計年報 2015) 5 都市部と農村部の人口比率はどのように変化しているのだろうか。

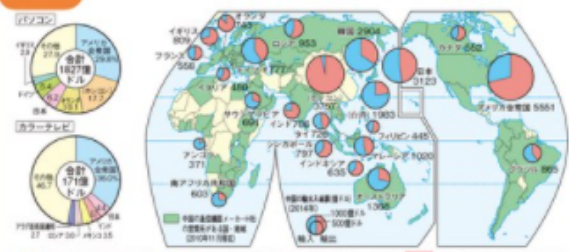
238 2 新 現代世界の課題

課題

中国の経済格差だけでなく、p.238 ではPM2.5の問題をはじめとする大気汚染や、砂漠化が原因で発生する黄砂といった環境問題など、今日の課題にまで言及しました。

展望

p.240



1 中国の貿易相手先(中国統計年報 2015, ほか) 2 中国の貿易相手先(2014年) (UN Comtrade) 3 中国の貿易相手先(2015年) (UN Comtrade) 4 中国の貿易相手先(2015年) (UN Comtrade)

5 リード 図p.238から中国の貿易相手先が読み取れる。中国の海外進出の動きも見ていこう。

リンク先 国際的な人口移動(2015)

6 プラス 図 日本における中国・華人 日本には約70万人の中国籍の人口が暮らしているが、日本企業を支援して帰化した人も約100万人以上の中国籍の華人がいる。そのうち約10万人は中国籍の華人から帰化した人である。中国籍の華人は日本企業に貢献している。中国籍の華人は日本企業に貢献している。中国籍の華人は日本企業に貢献している。

7 中国の海外進出 経済成長によって巨大な市場となった中国では、鉱産資源やエネルギー資源、食料品など、さまざまな物に対する需要が高まり、その影響は世界各地に及んでいる。例えば、南アメリカでは鉄鉱石や大豆、アフリカでは石油や鉱産資源の中国向け輸出で経済が活況を呈している。その一方で、近年は中国企業の海外進出も進められている。自動車や電気機器のメーカーを中心に、製品を販売する国に工場を建設し、現地で生産を行う中国企業が増加している。また、アフリカの油田やオーストラリアの鉄鉱山の開発に対して投資を行う企業もみられる。中国企業が海外に進出する背景には、輸出超過によって生じる各国との貿易摩擦の問題や増大する国内の資源需要などの要因がある。中国政府はアフリカの援助の拡大とともに東南アジアなどとのFTAの締結を進めており、中国企業の海外進出がよりいっそう増加すると見込まれている。

8 チェック 中国の経済成長は、世界にどのような影響を与えているのだろうか。

240 2 新 現代世界の課題

展望

その地域の現在の動きや今後の展望まで言及しています。例えば p.240 では、中国の発展に伴った人や企業の世界進出が、世界経済に与える影響を学習できます。

雨温図や図形表現図の読み取り方 など、必要な「地理的技能」を丁寧に解説

全 20 項目の 技能をみがく で解説

学習事項を理解するだけでなく、センター試験を解くためにも必要な地理的技能について、全 20 項目にわたって解説しています。近年頻出の「図形表現図」についても、読み取る際のポイント、考え方を解説しています。

技能をみがく 20 掲載箇所一覧

- | | |
|---------------------------------|--------------------------------|
| 1 時差の計算.....11 | 11 写真の見方 (2) ～気候～.....59 |
| 2 統計地図の読み取り方とつくり方.....16 | 12 図形表現図の読み取り方.....105 |
| 3 空中写真の利用.....19 | 13 統計資料のグラフ化・グラフの読み取り方.....118 |
| 4 地形図の利用 (1) ～地図記号～.....20 | 14 分布図の読み取り方.....152 |
| 5 写真の見方 (1) ～地形～.....39 | 15 三角グラフの読み取り方.....155 |
| 6 地形図の利用 (2) ～等高線～.....45 | 16 人口ピラミッドの読み取り方.....178 |
| 7 地形図の利用 (3) ～V字谷と地形断面図～.....46 | 17 地形図の利用 (5) ～集落の形態～.....184 |
| 8 地形図の利用 (4) ～小地形と土地利用～.....47 | 18 地形図の利用 (6) ～新旧比較～.....186 |
| 9 気候区分の判定.....57 | 19 写真の見方 (3) ～生活文化～.....206 |
| 10 雨温図・ハイサーグラフの読み取り方.....58 | 20 地域区分図の読み取り方.....230 |

技能をみがく 10 雨温図・ハイサーグラフの読み取り方

TRY

1. ①②、東京の平均気温の最高値(13.0℃)と最低値(5.0℃)を求め、その差を求めよ。

2. ③、東京の平均気温の最高値(13.0℃)と最低値(5.0℃)の差を求めよ。

3. ④、東京の平均気温の最高値(13.0℃)と最低値(5.0℃)の差を求めよ。

POINT

①②、東京の平均気温の最高値(13.0℃)と最低値(5.0℃)の差を求めよ。

③、東京の平均気温の最高値(13.0℃)と最低値(5.0℃)の差を求めよ。

④、東京の平均気温の最高値(13.0℃)と最低値(5.0℃)の差を求めよ。

解説

①②、東京の平均気温の最高値(13.0℃)と最低値(5.0℃)の差を求めよ。

③、東京の平均気温の最高値(13.0℃)と最低値(5.0℃)の差を求めよ。

④、東京の平均気温の最高値(13.0℃)と最低値(5.0℃)の差を求めよ。

技能をみがく 20 地域区分図の読み取り方

TRY

1. ①、インドの地域区分図を参考に、②に示す地域の気候区分を答えよ。

2. ③、②の気候区分を答えよ。

POINT

①、インドの地域区分図を参考に、②に示す地域の気候区分を答えよ。

②、②の気候区分を答えよ。

③、②の気候区分を答えよ。

解説

①、インドの地域区分図を参考に、②に示す地域の気候区分を答えよ。

②、②の気候区分を答えよ。

③、②の気候区分を答えよ。

p.105

技能をみがく 12 図形表現図の読み取り方



TRY

①～③を比較し、どの家畜も多い国、特定の家畜のみ多い国、いずれの家畜もあまりみられない国をあげよう。また、その理由も考えよう。

① 牛の頭数(2013年) (FAOSTAT) ①②③ プラジル、インド、中国、アメリカ合衆国に多い。インドに牛が多いのは、ヒンドゥー教で牛の殺害が禁止されているため、食肉用ではない。



④ 羊の頭数(2013年) (FAOSTAT) ④⑤ 中国に多い。豚肉を食肉の中心とするヨーロッパにも分布する。ムスリムは豚を忌避しており、北アフリカから中央アジアのイスラム圏には分布しない。



⑥ 豚の頭数(2013年) (FAOSTAT) ⑥⑦ 中国に最も多く分布するが、オーストラリアや西アジア、北アフリカなどの乾燥地域での飼育頭数も多い。

図形表現図の読み取り

牛・豚・羊のどの家畜も多いのは中国であるが、その多くは自給用に飼育されている。それに対して、アメリカ合衆国やブラジル、オーストラリアなどは輸出用の割合が高い。また、宗教上の教義から特定の家畜の肉を食さない国があるほか、自然環境の違いによっても分布に特徴が表れている。牛・豚・羊

のうち、最も乾燥に強い羊は、オーストラリアや西アジアなどにも多く分布しているが、乾燥に弱い豚はそれらの地域が分布の空白地帯となっている。人口の大小や気候の違い、宗教分布などの情報を重ね合わせることで、①～③の背景をより深く考察することができる。

TRY

解説、「ポイント」をふまえて「TRY」に取り組むことで、問題を解くための考え方が身につきます。

POINT

それぞれの図ごとに、読み取る際の道しるべとして「ポイント」を設置しています。

解説

注目すべき点や考え方の道筋をつかむことができます。

リード

学習のポイントとなる視点や課題を提示しました。課題意識を持ちながら、意欲的に学習できます。

読図

地図やグラフなどの読図のポイントを提示しています。本文と関連させながら、読み解く作業を繰り返すことにより、読図のテクニックが身につきます。

プラスα

全編にわたって58か所設置！学習内容をより深く理解するための補足や、学習内容と関連のあるテーマをまとめたコラムを設けています。「なるほど」と思えるようなテーマや発展的なテーマを通して、知識を深めることができます。

プラスαで扱っているおもなテーマ

- 地図のさまざまな利用法 (p.14)
- 天井川の形成 (p.37)
- 風の成因 (p.52)
- 砂漠化を防ぐアカシア (p.89)
- 冷凍船の発明によって発達した南半球の農牧業 (p.98)
- 食料価格高騰の問題 (p.114)
- データセンターの立地条件 (p.139)
- 航空機に使われる日本企業の新技術 (p.144)
- パナマ運河とスエズ運河 (p.160)
- メトロポリスとメガロポリス (p.188)
- ムスリムは豚を食べてはいけないか？ (p.212)
- 東南アジアの焼畑 (p.250)
- 農業がさかんな黒土地帯 (p.292)
- ラテンアメリカに進出するアグリビジネス企業 (p.312)
- 日本の風土と自然災害 (p.329)

リンク

地誌分野では、学習内容と関連する系統分野ページへのリンクを設けています。

用語解説

学習するうえで大切な用語を丁寧に解説しています。さらに、巻末さくいんでは、用語解説を設けているページを赤文字で表示し、用語を探しやすいようにしています。

例：p.237 用語解説



p.336
さくいん
では…



1 日本企業が経営する肉牛のフィードロット (オーストラリア、ダスマニア牧, 2014年撮影)



2 オーストラリアの農牧業 (Garcanda Atlas 2007, ほか)
3 年降水量と放牧される家畜、飼育される作物との関係に留意しよう。

リード

写真や図のように、オーストラリアやニュージーランドからは、多くの農畜産物がアジアへ輸出されている。これらの国の農業の特徴をみてみよう。

リンク

新大塚で発達した企業型農業 (p.100)

小麦	1000.2%	4.0%	52.2
大豆	20.4%	94	
牛肉	108.0%	5.0	
豚肉	27.8%	13.0	13.5

1 オーストラリアの小麦と牛肉の輸出先(2013年) (FAOSTAT)

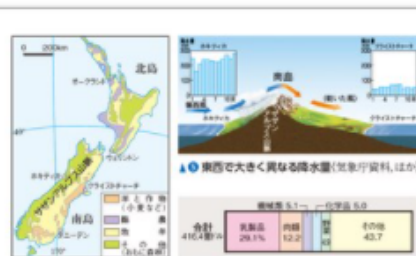
用語解説

地下排水 農業地下水をくみ上げるために掘られた井戸のこと。以前は各種の井戸がなかったが、現在はポンプによってくみ上げられている。その水(排水)は、地下深くから湧き出ると同時に、地表近く、排水溝も高い。また、そのほかの排水物も多く含まれている。

3 アジア諸国に輸出される農畜産物

大規模なオーストラリアの農業 オーストラリアの農業の規模はきわめて大きく、内陸部には日本の都府県面積に相当する牧場もみられる。そこでは、羊や牛の群れに出会うことはまれで、家畜の管理には小型飛行機やヘリコプターを利用している。内陸で放牧される羊の多くは羊毛を採取するためのもので、かつては日本に大量に輸出されていた。しかし今は、中国向けが多くなっている。また、オージービーブというブランドで知られる牛肉は、日本にもきかんに輸出されている。牧場のなかには、日本の商社やスーパーマーケットと専属契約を結び、品種改良などにより日本人好みの肉質のやわらかい牛肉を生産しているところもある。一方、おもに穀物が栽培されている大陸南部の農地も広大で、農家1戸あたりの農地面積が数haに及ぶものも珍しくない。耕作や収穫には、大型のトラクターやコンバインが用いられている。小麦など、オーストラリアで生産される穀物の収穫時期は、北半球とは異なるため、輸送前に世界の穀物市場の価格変動を抑える役割をもっており、アジアにもきかんに輸出されている。

降水量に左右される農業 オーストラリアの降水量分布は、きわめて扇形的である。内陸の砂漠を中心として同心円状に分布し、大陸の外側になるほど降水量がしだいに多くなっている。しかし、大陸全体としては、その量は少ない。降水量が比較的多いのは、北部と東部、そして南西部である。砂漠とその周辺では農業はみられないが、そのほかの内陸部では、牛や羊の粗放的な放牧が行われている。とくに、グレートアーテジアン(大潤年)盆地では、



1 ニュージーランドの土地利用 (Garcanda Atlas 2007, Contrade)
2 ニュージーランドの輸出品(2014年) (UN)
3 羊の放牧でえさをやるようす (ニュージーランド、クライストチャーチ近郊, 2012年撮影)

p.320-321

開拓以来、豊富な承压地下水を掘り抜き井戸(掘井)でくみ上げることによって牧畜が発達してきた。しかし今では、地下水の量が減少したり、枯れたりしている井戸も多い。その周辺では、一部、土壌の塩性化など環境問題も発生している。大陸南部の沿岸地域では、小麦や大麦などの穀物栽培と羊の飼育とを組み合わせた混合農業が営まれている。この農業地域は、大陸の東部から南部、南西部へと広がっており、世界的な穀食地帯を形成している。また、マリーダーリング盆地の河川流域では、混合農業のほか、ぶどうや柑橘類などの果樹栽培、醸造による醸作物などがみられる。さらに、大都市近郊では、酪農や野菜栽培が活発に行われている。このような農産物や畜産品の多くは、日本や東南アジアなど、おもにアジア諸国に向けて輸出されている。ニュージーランドでも、畜産がさかんである。北島ではおもに羊・牛肉の放牧や酪農が行われており、チーズ・バターなどの乳製品や羊毛、羊肉・牛肉は、この国の重要な輸出品となっている。南島は、南北に連なるサザンアルプス山脈を境に、その西側と東側とで大きく気候が異なる。山脈の西側では、偏西風の影響を直接受けて年降水量もきわめて多く、うっそうとした森林が広がっている。しかし、傾斜が急なこともあって、農業にはほとんど利用されていない。それに対して、山脈の東側は乾燥している。なだらかな草原が広がり、おもに羊の放牧地や穀物栽培地として利用されている。また、かぼちゃの生産も多く、日本で秋から春にかけて出まわるものは、南半球のニュージーランドやトンガから輸入されている。

プラスα

太平洋の島々の農業

太平洋の島々では、いちごなど伝統的で自給的な作物を栽培してきたところが多い。しかし、トンガでは、1980年代末以降、日本向けにかぼちゃの栽培が始められ、その輸出量が急増した。2000年代前半のピーク時には、この国の重要な輸出品となったが、日本市場でニュージーランド産・メキシコ産などと競合したことによって、今は韓国に多く輸出されている。また、養蚕機械や肥料・農業などは、オーストラリアや中国から輸入される。

チェック

11 オーストラリアやニュージーランドの農畜産物が日本にとって重要な輸出品を説明しよう。
21 オーストラリアでは、降水量が少ない地域で農業を行うことによってどのような問題が生じているか、説明しよう。

チェック

本文から答えが導ける問いで、学習内容を確認したり、生徒自身の考えをまとめたりするコーナーです。「リード」と対応し、学習内容のポイントを整理できます。

本文ページでは誌面のデザインを統一し、ユニバーサルデザインに対応しています。
※詳細は本資料 p.34 参照

新詳地理 B 教科書の全体構成

充実の地域事例とともに、より詳しく、わかりやすくなった系統地理分野。全編のうち約 6 割が系統地理分野です。

もくじ

刻々と変化する世界 巻頭 1
はじめに 巻頭 3

第 I 部 さまざまな地図と地理的技能

1章 地理情報と地図 6

1節 地図の発達 6
1 現代世界の地図 6
2 世界図の変化と地図 8

2節 地図の種類とその利用 9
1 地球上の位置 9
2 時差の求め方 10
3 地球儀とさまざまな地図 12

3節 地理情報の地図化 14

2章 地図の活用と地域調査

1節 地図の活用 18
1 身近な地域の調査 22
1 調査テーマの設定 22
2 課題の調査 23
3 調査結果のまとめと発表 26

第 II 部 現代世界の系統地理的考察

1章 自然環境

1節 世界の地形 28
1 地形の成因 28
2 地球規模の大地形 29
3 河川と海岸の小地形 36
4 そのほかの特徴的な地形 42

2節 世界の気候 50
1 気候の成り立ち 50
2 世界の気候区分 56
3 気候と植生・土壌 72
4 変化する気候 74

3節 日本の自然の特徴と人々の生活

1 日本の地形 76
2 日本の気候 78
3 開発に伴う災害と防災 80

4節 環境問題

1 世界の環境問題 82
2 さまざまな環境問題 83
3 日本の環境問題 92

2章 資源と産業

1節 世界の農林水産業 94
1 農業の発達と分布 94
2 農業の地域区分 96
3 現代世界の農業の現状と課題 102
4 世界の林業・水産業 108
5 日本の農林水産業 110

2節 食料問題 112
1 世界の食料問題 112
2 発展途上国の食料問題 113
3 先進国の食料問題 116
4 日本の食料問題 116

3節 世界のエネルギー・鉱産資源

1 エネルギー資源の種類と利用 120
2 化石燃料の分布と利用 121
3 電力の利用 123
4 鉱産資源の種類と利用 124

4節 資源・エネルギー問題 128
1 現代世界の資源・エネルギー問題 128
2 さまざまな資源・エネルギー問題 129
3 日本の資源・エネルギー問題 133

5節 世界の工業

1 工業の発達と種類 136
2 工業の立地とその変化 138
3 世界の工業地域 140
4 現代世界の工業の現状と課題 144
5 日本の工業 149

6節 第 3 次産業

1 第 3 次産業の発展 153
2 多様化する観光産業 156
3 日本の観光産業 157

7節 世界を結び交通・通信

1 世界の交通網 158
2 情報と通信の発達 161

8節 現代世界の貿易と経済圏

1 私たちの生活を支える貿易 162
2 国際分業の発達と貿易の地域間格差 163
3 貿易の自由化と経済連携 165
4 日本の貿易の現状と課題 167

3章 人口、村落・都市

1節 世界の人口

1 世界の人口問題 171
2 発展途上国の人口問題 172
3 先進国の人口問題 174
4 日本の人口問題 176

2節 村落と都市

1 集落の成り立ち 180
2 村高の形態と機能 182
3 都市の機能と生活 188

4節 都市・居住問題 191
1 世界の都市・居住問題 191
2 発展途上国の都市・居住問題 192
3 先進国の都市・居住問題 195
4 日本の都市・居住問題 198

4章 生活文化、民族・宗教

1節 世界の衣食住 201
1 世界の衣食住の地域的差異 201
2 衣食住の世界的な統一化 204
3 日本の衣食住 205

2節 民族と宗教 208
1 世界の民族・言語 208
2 世界の宗教 210

3節 現代世界の国家 213
1 世界の民族・領土問題 215
2 多様な原因をもつ民族・領土問題 216
3 共生に向けた取り組み 221
4 日本の領土をめぐる問題と外国人との共生 223

第 III 部 現代世界の地誌的考察

1章 現代世界の地域区分

1 地域区分とは何か 228

2章 現代世界の諸地域

1節 地域の考察方法 231

2節 東アジア 232
1 中国の多岐と巨大な人口 233
2 中国の食生活と農業の変化 236
3 中国の工業化と巨大市場 237
4 中国の海外進出 240

3節 東南アジア

1 東南アジアの歴史と文化・民族 247
2 東南アジアの農業とその変化 248
3 ASEAN の形成と工業の発展 252
4 ASEAN の変化と課題 254

4節 南アジア

1 南アジアの多岐とヒンドゥー教 257
2 インドの農業と農村の変化 259
3 発展するインドの産業と変化 260

5節 西アジアと中央アジア

1 イスラームを中心とした生活文化 264
2 交易を軸に発達した都市 266
3 豊かな資源と人々の生活 267

6節 北アフリカとサハラ以南のアフリカ

1 歴史的な背景によって形成された多様な文化 271

自然環境から始まる統一した展開で学べる地誌単元

2 一次産品への依存が強い産業 273

3 人々の生活の変化と地域域との結びつき 275

7節 ヨーロッパ

1 ヨーロッパの成り立ち 278
2 結びつくヨーロッパ 279
3 ヨーロッパの多様な農業と共通農業政策 282
4 移り変わるヨーロッパの工業 284
5 これからのヨーロッパ 286

8節 ロシア

1 ロシアの歴史と社会の変化 289
2 大きく変化したロシアの産業 292

9節 アングロアメリカ

1 移民国家としてのアメリカ合衆国の発展 296
2 アメリカ合衆国の人口と都市 298
3 世界の農業のかきまをにぎるアメリカ合衆国 300
4 基礎する科学技術と産業 302
5 世界の中のアメリカ合衆国 305
6 アメリカ合衆国との結びつきが強いカナダ 306

10節 ラテンアメリカ

1 ヨーロッパ社会の影響が強い文化 309
2 大地所有制と農業の変化 311
3 鉱産資源を基盤とした工業化と生活の変化 313

11節 オセアニア

1 オセアニアの移民の歴史と多文化社会 317
2 資源を基盤とするアジア諸国との結びつき 319
3 アジア諸国に輸出される農畜産物 320
4 物や人の移動が促されるアジアとの結びつき 322

3章 現代世界と日本

1節 日本が抱える地理的な課題 324
2節 日本が抱える課題の追究 326
1 テーマを設定する 326
2 課題を探究する 327
3 仮説を検証する 328
4 まとめと発表 329

4章 現代世界と日本

1 日本が抱える地理的な課題 324
2 日本が抱える課題の追究 326
1 テーマを設定する 326
2 課題を探究する 327
3 仮説を検証する 328
4 まとめと発表 329

技能をみがく 20

1 時差の計算 11
2 統計地図の読み取り方とつくり方 16
3 空中写真の利用 19
4 地形図の利用 (1) ~地図記号~ 20
5 写真の見方 (1) ~地形~ 39
6 地形図の利用 (2) ~等高線~ 45
7 地形図の利用 (3) ~V字谷と地形断面図~ 46
8 地形図の利用 (4) ~小地形と土地利用~ 47
9 気候区分の判定 57
10 等高線・ハイサーグラフの読み取り方 58

11 写真の見方 (2) ~気候~ 59
12 図形表現図の読み取り方 105
13 統計資料のグラフ化・グラフの読み取り方 118
14 分布図の読み取り方 152
15 三角グラフの読み取り方 155
16 人口ピラミッドの読み取り方 178
17 地形図の利用 (5) ~集落の形態~ 184
18 地形図の利用 (6) ~新旧比較~ 186
19 写真の見方 (3) ~生活文化~ 206
20 地域区分図の読み取り方 230

トピック

津波への備え 33
縄文海進によって形成された沖積平野 38
サンゴ礁 41
ジェット気流の蛇行 53
エルニーニョ現象・ラニーニャ現象 75
都市の災害対策 81
世界の農業を動かす穀物 106
まぐろの完全養殖 111
水資源で結びつく世界 126
バイオエタノールの課題 132

日本近海の海底資源 134
世界に広がる LED 照明 151
コンビニと物流システム 154
日本における LCC の導入と課題 159
EPA と FTA の効果と課題 166
見直される公共交通機関 196
ハラル認証とムスリム 212
難民問題 222
津波が発生するしくみ 327

地域を見る目

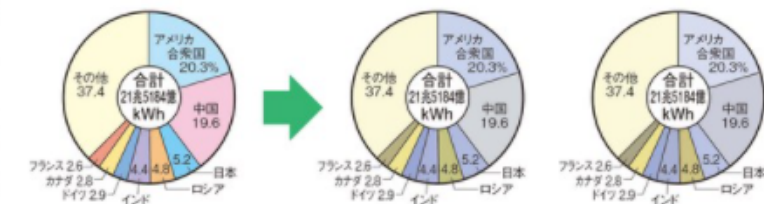
氷河湖決壊の危機が迫るブータン 85
インドネシアにみる熱帯林の保全 87
サハルの砂漠化防止への取り組み 89
石炭依存と環境保護にゆれるポーランド 91
トゥルファン盆地の灌漑農業 97
観光産業と共存するアルプスの農業 99
フィードロットの新しい課題 101
急増する南アメリカの大豆生産 104
石油化学工業が発達したロツテルダム 141
ポスト BRICS として注目されるベトナム 143
インドにみる人口抑制の取り組み 173
デンマークにみる少子高齢化の取り組み 175
岡山都市メキシコシティにおける都市環境 194
早くから発生したロンドンにおける都市問題と再開発 197

民族・領土をめぐる対立 218
~ベリスチア問題を例に 218
シリア内戦と ISL をめぐる問題 220
多民族・多文化社会のオランダ 221
台湾の発展 239
北朝鮮の動向 243
イスラームに従う国づくりへの動き 268
ルワンダの復興と発展 272
EU における多文化の共生 281
EU と環境・エネルギー政策 285
EU とトルコ加盟問題 287
ロシアとヨーロッパの間でゆれるウクライナ 291
ヒスパニックとアジア系移民の増加 297
産学協同で発展するシリコンヴァレー 304

ユニバーサルデザインに対応 一特別支援教育への配慮一

1 カラーユニバーサルデザインに配慮した見やすくわかりやすい色調

●色覚特性をもつ生徒が同じように見えてしまう色を隣どうしに配置しないことや、境界線を黒ではっきりと書くことで、グラフなどの資料を読み取りやすくしています。



<カラーユニバーサルデザインに配慮した図>

▲ p.123 世界の電力生産

<D型色覚の人の見え方>

※色覚特性のD型とP型は、特性のなかでも代表的なものです。上下の図は、それらの色覚特性をもつ人の色の見え方をシミュレーションしたものです。

<P型色覚の人の見え方>

●地図についても、色覚特性をもつ生徒も識別しやすい色を使って配色しています。

<カラーユニバーサルデザインに配慮した図>



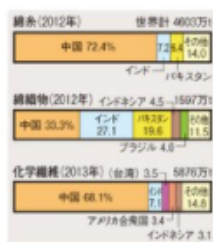
▲ p.278 ヨーロッパの言語分布

<D型色覚の人の見え方>



2 読み取りやすい図版表現

●図の周囲をグレーで囲むことで、どこまでが同一の資料であるのか、わかりやすくしています。また、図の周囲を暗くすることで色のちらつきを抑え、読み取りに集中できるようにしています。右の図の場合、三つの帯グラフがまとまって一つの資料を構成することがわかります。



▲ p.145 主な繊維製品の生産国

3 学習が進めやすい工夫

●導入資料や図版・写真、リードやチェックの設問を各ページの同じ場所に配置し、見開きのレイアウトを原則統一することで、スムーズに学習を進められるようになっています。

リード 火山が作り出す地形や地帯災害の特徴をあていこう。
 ※ロゴは文字で示し、コーナーの役割をわかりやすくしています。

本資料 p.30-31 で詳しく紹介！

4 読みやすく誤読を防ぐ文字

●教科書のコラム、図版のキャプションなどには、ユニバーサルデザインフォント (UDフォント) を使用しています。これにより、文章が読みやすくなり、誤読を防げるようになっています。

<UDフォント>

ステップとよばれる草原や砂漠が広がって
 ・ふりがなはゴシック体にして見やすくしています。
 ・濁点部分のすきまを充分確保して視認性を高めています。
 ・横線を太くすることで、視認性を高めています。

授業への万全のサポート

教師用指導書、指導者用デジタル教材、準拠ノートなど、地理授業の周辺教材を充実させ、万全のサポート体制を整えております。弊社「高校教科書・副教材カタログ」および、「高等学校 指導者用商品・サポート案内」に詳細情報を掲載しています。あわせてご覧ください。

見本 サンプル ご審査用見本、または部分サンプルをご用意しています。弊社までご連絡ください。

教師用指導書

新詳地理B 指導資料 DVD-ROM付

- 本文や図版・写真の解説、板書例などを掲載しています。
- パスワード認証の「Webサポート」をご利用いただけます。

教材備品

指導者用デジタルコンテンツ集 地理 (Windows版) (iOS版) / 学習者用デジタルコンテンツ集 地理 (iOS版)

サンプル

- 地形や気候、緯度・経度、農業・工業など地理学習に必須のデジタル図版、統計データなどを収録しています。

準拠副教材

新詳地理B ノート

見本

- 「作業」→「確認」→「まとめ」の構成で、知識の整理を強力にサポート。
- より簡潔にまとめた穴埋め文章で、重要なポイントをおさえられます。

ウェブサイト

- 最新の統計・資料・写真など豊富なコンテンツを収録しています。
- ➔<http://www.teikokushoin.co.jp/>

定期冊子

地理・地図資料

- 年4回無料でご希望の先生にお届けしています。
- ➔ご希望の方は、弊社までご連絡ください。一部バックナンバーもご用意しています。

地理教科書、地理副教材のラインアップ



高校生の地理A (地A-312) AB判 184ページ



新地理A (地A-308) B5判 210ページ



新詳地理資料集 COMPLETE 2017 AB判 304ページ



図説地理資料 世界の諸地域NOW AB判 248ページ



新詳地理の研究 B5判 344ページ

<特色一覧>

※本資料および下記の表データは弊社ウェブサイトにて閲覧・ダウンロードできます。

項目	特色
総合的な特色	<ul style="list-style-type: none"> ◆因果関係がわかる詳細な本文記述に連動した、豊富な視覚資料が整理されて掲載されている。 ◆学習に関連する事象についてはコラムで補充されている。 ◆全体を通して系統地理単元が充実しており、日本や世界の最新の事例が積極的に記載され、現代世界への地理的な理解を深められる教科書になっている。
内容	<ul style="list-style-type: none"> ◆世界と日本の最新動向が因果関係を踏まえて記述されており、世界各地の地理に対する理解が深まるよう編集されている。 • 世界と日本の新しい動向が掲載されているので、変化する世界各地の様子を詳細に学習できるようになっている。 • 系統地理単元では、事例が豊富で、因果関係まで記述されているため、体系的に整理しやすくなっている。 • 地誌単元では、その地域の基盤となる自然環境や歴史的背景をふまえて記述されており、地域に対する理解が深まる。 • 系統地理単元では日本の事例が、地誌単元では日本と世界との関わりが豊富に取り上げられ、日本と世界各地の地理的事象を比較・対照させることで、現代世界が抱える諸課題への理解がより深められるようになっている。 • 学習上の重要項目がもれなく丁寧に記述されており、知識を確実に定着できるようになっている。
構成・分量	<ul style="list-style-type: none"> ◆特設ページやコラムが本文記述を適切に補助し、幅広い知識が身につくよう工夫されている。 • 学習指導要領にあわせて、世界の諸地域が偏りなく取り上げられており、幅広い学習が可能になっている。 • 地図に関する資料が巻末にまとめられており、必要に応じて適宜活用できる。 • 誌面全体が、本文記述と図版・写真が適切に関連しあうように工夫されており、より地域を具体的に学習できる。 • 「技能をみがく」ページが豊富に設置されており、地理学習に必要な地理的技能を身につけられる。 • 「トピック」や「地域を見る目」、「プラスα」などのコラムが設けられており、学習に関連する事象について、より幅広い知識を身につけられるようになっている。 • 発展的な内容が学習できるように、側注欄の解説や資料、特設ページが充実している。
表記・表現および使用上の便宜	<ul style="list-style-type: none"> ◆詳細な記述に加えて写真やグラフ、イラストなどの視覚資料が豊富に設けられており、理解が深まるよう工夫されている。 • 詳細な記述で、現代世界の地理的事象や諸地域を深く理解できる本文となっている。 • 写真やグラフ、イラストなどの視覚資料が豊富に設けられており、視覚的に理解できるようになっている。 • 「用語解説」を設けているページがさくいんページに赤字で表示されており、使用上の便宜が図られている。 • 本文行間には、関連する事項を扱っているページの参照ページや関連図版・写真の図番号が割り当てられている。 • グラフなどの統計資料は、新しいデータが使用されている。 • カラーユニバーサルデザインに対応しており、色覚特性のある生徒にも読み取りやすい表現になっている。
その他	<ul style="list-style-type: none"> • 写真や図版が映えるよう、発色の良いコート紙が使用されている。 • 1年以上の使用に耐えるよう、堅牢な製本になっている。 • 環境に配慮した再生紙と、植物油インキが使用されている。

<著作者>

片平 博文 (立命館大学 教授)

◆歴史地理学・オセアニア地誌

矢ヶ崎 典隆 (日本大学 教授)

◆アメリカ地誌

内藤 正典 (同志社大学 教授)

◆現代イスラム地域研究

戸井田 克己 (近畿大学 教授)

◆地理教育・日本地誌・民俗学

友澤 和夫 (広島大学 教授)

◆経済地理学・インド地誌

永田 淳嗣 (東京大学 准教授)

◆人文地理学・農業地理学・東南アジア地誌

須貝 俊彦 (東京大学 教授)

◆地形発達・環境地理学

丸川 知雄 (東京大学 教授)

◆中国経済

木村 圭司 (奈良大学 教授)

◆気候学・地理情報学

大山 修一 (京都大学 准教授)

◆アフリカ地誌・環境地理学



〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 3-29
 TEL 03-3262-0831
 URL <http://www.teikokushoin.co.jp/>